

南北朝期禅僧喫茶史料集成並びに訓註（一）

——寂室元光関係史料——

館 隆 志

はじめに

本論は、南北朝期に活躍した禅僧の「喫茶」史料を収集し、注釈を加えて研究者への便宜を図り、南北朝期禅林における喫茶文化の具体像の一端を明らかにすることを目的とする。禅籍の精密な文献読解を用いて、喫茶のみならず栽培や贈答を含む茶文化の実態を探り、禅林における多様な喫茶の実践のあり方を解明する方法は、ここでは便宜的に「禅茶文献学」と呼んでおく。

すでに、鎌倉期に活躍した禅僧の喫茶史料については、「鎌倉期禅僧喫茶史料集成並びに訓註」と題して研究し、それらを合わせた『鎌倉時代禅僧喫茶史料集成』（勉誠出版、二〇二三年）を公刊しており、本論はその続篇となるものである。

「鎌倉期禅僧喫茶史料集成並びに訓註」では、出来得るだけ網羅的に収集し、年次順に訓註を重ねていつ

たが、南北朝期のものは史料が極めて多くなり、収集も容易ではない。そこで、研究上必要と判断される史料を優先的に取り上げ、順次読解を進めることで、最終的にできるだけ網羅的な形へと近づけていく方針をとる。

なお、本プロジェクトでは、禅語録・書簡・行状記などを中心とする一次史料を基盤として、鎌倉・南北朝・室町を貫く禅林喫茶文化の受容と変容を通時的に整理することを視野に入れている。今後は曹洞宗における喫茶実践も含め、禅林喫茶文化の全体像を再構築する予定である。

『南北朝期禅僧喫茶史料集成並びに訓註（一）』では、臨済宗大覚派で、永源寺の開山である寂室元光（一二九〇～一三六七）の喫茶関係史料を収集し紹介する。『鎌倉時代禅僧喫茶史料集成』では、師流である蘭溪道隆（一二二三～一二七八）、約翁徳儉（一二四四～一三三〇）の喫茶史料を紹介しており、この系譜における喫茶文化の受容状況がわかると考えるためである。

寂室元光と喫茶文化

寂室元光は、南北朝という激動期において、単なる一地方の禅僧ではなく、宋・元における禅林の作法を、地域社会に根づかせたと考えられる禅僧の一人である。特に隠棲や自給自足の生活を好んだ禅僧の語録は後世に残りづらいことを踏まえるならば、この時代の禅林における基本の茶文化を知り得る極めて貴重な事例となっている。

寂室の語録や行状記には、禅寺における日常修行での喫茶文化や儀礼の献茶のほかにも、栽培・摘茶・贈

答など多様な喫茶文化の実践が記され、禅林における修行生活と茶との関わりを具体的に示している。

寂室の茶に関する言行は、師流である蘭溪道隆・約翁徳儉の喫茶文化を継承しながらも、東福寺や建長寺、元朝での修行経験を踏まえつつ、永源寺という新たな地方寺院において独自に展開した点に大きな特徴がある。

すなわち、寂室の喫茶文化には、①宋・元の出典や作法を踏まえた規範性、②永源寺周辺の自然環境を背景にした茶の栽培や摘茶の実践性、③法談・接客・仏事・贈答における社会との接点など茶の社会性が認められ、中世禅寺の生活文化を具体的に知るうえで重要な手がかりとなる。また、彼の語録に見える茶の描写は、単なる嗜好品ではなく、坐禅と同様に日常修行の一つとして茶が位置づけられる点でも注目される。

加えて、永源寺周辺では中世末以降、茶の生産が拡大し、江戸期には「政所茶」として流通するに至ったことがよく知られている。寂室の茶に関する記録は、後世の茶産地形成に先行する中世の背景を示す史料としても重要である。なお「政所茶」の中世の淵源については、今後の課題としたい。

寂室自身が摘茶の修行によって師家に見出され、以後も摘茶を重視したことは、他の禅僧にはほとんど例がない特異な事例である。寂室の系譜を通じて、宋・元の喫茶文化が畿内東部にどのように定着したかを考える上でも、寂室の茶関連史料は欠くことができない。

本論では、寂室元光の喫茶関係史料の読解を通して、南北朝期禅林における喫茶文化の具体像を明らかにし、茶が儀礼・日常生活・教化活動でどのような役割を果たしていたかを、史料に基づき把握することを目指すものである。

凡例

一、本論で紹介する史料は、南北朝期の禅僧の喫茶、および茶に関する史料である。ここで収集した南北朝期禅僧の史料とは、建武の新政の期間を含む、元弘三年（一一三三）から明徳三年（一一三九）までに示寂した僧侶の史料を、順次紹介する予定である。

一、論題は「南北朝期禅僧喫茶史料集成並びに訓註」であり、これに順次数字を付していく。ただし、この番号はあくまで便宜上のものであり、禅僧の生没年や史料の成立年次順ではない。

一、本論に掲げる史料番号は、人物ごとに通し番号を付して示す（例「寂室一」）。したがって、本論全体を通じた一括の通し番号は採用しない。

一、使用する漢字は常用漢字を基本とした。旧字体は新字体に直し、適宜、句読点訓点を付した。引用に際して用いた史料はそれぞれに明記しているが、点丸については、筆者の手によるものもある。

一、割註や本文よりも小さな文字で表記されている場合は「へ」にて表記した。

一、各史料は、原文を掲げたうえで、書き下し、語注、現代語訳の順に掲載した。書き下しに際しては「訓」と表記し、訓読訳（書き下し）の略として用いた。書誌情報は、それぞれの語注の冒頭に記した。

一、注釈と訳文は、あくまで限られた情報から導き出される範囲のものであり、参考程度に留めていただきたい。

一、読解に際して、漢字の読みは全体を読みやすくするためにできるだけ掲載するように努めた。ただし、仏教や禅の専門用語は、時代や宗派、研究者によっても相違があるため、難しい問題を含んでいる。そのため、漢字の読みについても参考程度に留めていただきたい。

一、訳文の後に、それぞれの文献における喫茶史料としての位置づけや、茶に関連する特徴的な語を【】で記し、内容の要約や、喫茶史料としての見解を記した。

一、出典などを含む細かい注については補注として、それぞれの史料の最後に掲載した。すでに掲載済みの補注は、既出と記した上で、その史料番号を示した。

一、本論で掲載した史料は、その多くが大学院のゼミでも講読したものであり、掲載にあたってはそれらの成果も踏まえたととなっている。ゼミの参加者は、二〇二四年は法政大学非常勤講師・彭丹、駒澤大学大学院・吉岡綿美、LETHI TRAMY¹、積南梨香、PEDETTI FILIPPO²、二〇二五年は法政大学非常勤講師・彭丹、駒澤大学大学院・LETHI TRAMY³、積南梨香、永瀬智子の四名である。また、訳注に際しては、特に中国語としての文法や意味について、彭丹先生よりご指導を賜った。

一、出典に用いた史料のうち、主立った書籍の略称は以下の通り。

『大正新修大藏経』、大正一切経刊行会、一九二四～一九三四年＝大正蔵。

『大日本統蔵経』京都蔵経書院編集・刊行、一九〇五～一九二二年（影印版、卅統蔵経、新文豊出版、一九七七年）＝統蔵。

『続群書類従』（底本続群書類従完成会版訂正三版、八木書店、一九七五～二〇〇〇年）＝続群。

『寂室録抄』駒澤大学所蔵＝江戸時代写、寂室抄。

『頭書 永源寂室和尚語録』元禄十年刊＝元禄本。

『永源寺町史・永源寺編』永源寺町史編さん委員会、二〇〇二年＝永源町史。

『蘭溪道隆禅師全集』第一巻、思文閣出版、二〇一四年＝蘭溪全。

『訓註 永源寂室和尚語録』全三巻、禅文化研究所、二〇一六年＝訓註本。

『鎌倉時代禅僧喫茶史料集成』館隆志、勉誠出版、二〇二三年＝鎌倉禅茶。

「寂室一」『永源寂室和尚語』上「偈頌」

再遊大和寺

此地得重遊、春殘院落幽。花難帰樹上、雪易点人頭。鳴竹風吹夢、烹茶客自留。明朝又携杖、去要臥林丘。

【訓】再び大和の寺に遊ぶ。

此の地重ねて遊ぶことを得たり。春残りて院落は幽なり。花は樹上に帰り難く、雪は人頭を点じ易し。竹鳴れば風は夢を吹き、茶を烹れば客は自ら留まる。明朝又た杖を携え、去りて林丘に臥さんことを要す。

○『永源寂室和尚語』…寂室元光の語録。天理図書館には、永和三年の後跋を有する無刊記の五山版が所蔵される。

正保二年（一六四五）、元禄十年（一六九七）刊本（冠註）、享保元年（二七一六）、寛延四年（一七五二）刊本（冠註）、嘉永五年（一八五二）など、江戸時代に度々刊行された。○寂室元光：臨済宗大覚派の寂室元光（一二九〇～一三六七）のこと「補1」。○掲載書籍：「大正蔵八一・一〇二a」「訓註本上・三五」。○再遊大和寺：「補2」。○

大和寺：大和寺という固有名詞ではなく、大和（奈良）の寺という意味と推定される。○院落：中庭。○花難帰樹上

：「補3」。○雪易点人頭：「補4」。○竹鳴：「香巖撃竹大悟」の公案を踏まえる「補5」。○林丘：林と丘。人里離れた所。

【訳】再び大和（奈良）の寺に遊行する。

この「大和の」地に再び遊行する機会を得た。春が残っていて中庭は幽玄である。「散った」花が樹の上に再び戻ることはないが、雪は容易に人の頭に落ちて「くるかのように自然と老いて白髪が増えて」くる。竹が鳴ると風は夢を吹き払い、茶をいれると客は自然と留まる。明朝にはまた杖を携えて、林丘（人里離れた所）に行つて横になりたいものだ。

【入室の際の茶】【客人に対する茶】【茶話】寂室元光が大和（奈良）の寺を訪れた際の偈頌。奈良の寺で茶を入れてもらったものと思われる。禪寺か否かは不明であるが、奈良の寺院内で茶が飲まれていた事例といえる。この時代に、寺院で客人に茶をいれることが定着しはじめていることが示唆されている。

〔補注〕

〔1〕 寂室元光：臨済宗大覚派の寂室元光のこと。備州の藤原氏。山城国三聖寺の無為昭元のもとで沙弥となり、鎌倉禅興寺の約翁徳儉、一山一寧に歴参す。さらに入元し天目山の中峰明本、径山の元叟行端などに参学し、帰国後に約翁徳儉の法を嗣ぐ。備後永徳寺、摂津福源寺、近江永源寺の開山となる。円応禅師と諡する。『永源寂室和尚語』二卷がある。

〔2〕 再遊大和寺：『寂室和尚行状』「和之安部就于文殊像前、七日断絶飲食、身上熬香祈爾、求無上道之冥助」（続群九上・五八四）、『永源開山円応禅師紀年録』「詣和州安部於文殊像前期七日、煉頂祈修道抵于成也」（訓註本下・九）。寂室元光は十八歳の時に大和（奈良）の安部文珠院に七日間滞在している。この時の遊行を踏まえたものであろう。安部文珠院の旧寺地は桜井市安倍木材団地一丁目であり、現在は「安倍寺跡」として国の史跡に指定されている。

〔3〕 花難帰樹上：『景德伝灯録』卷十七の京兆華嚴寺休静章に「問、大悟底人為什麼却迷。師曰、破鏡不重照、落華難上枝」（大正蔵五一・三三八a）とある。

〔4〕 雪易点人頭：唐代の高蟾の「春」に「明月断魂清藹藹、平蕪歸思緑迢迢。人生莫遣頭如雪。縱得東風也不消」（『四庫全書』「經部」「總集類」）とある。老いていくことの形容として用いられている。

〔5〕 竹鳴：『香嚴撃竹大悟』の公案を踏まえる。『聯灯会要』卷八の香嚴智閑章に「一日、芟除草木、因抛瓦礫、撃竹作声、忽然省悟。遽帰沐浴、望為山作礼。嘆云、和尚大慈恩臨父母。当時若為我說破、何有今日之事。乃述偈云、一撃忘所知、更不自修治。動容揚古路、不墮悄然機。処処無蹤跡、声色外威。諸方達道者、咸言上上機。為山聞得云、此子徹也」（続蔵一三六・二八三c）とある。

〔寂室2〕『永源寂室和尚語』上「偈頌」

憶友人

山院春深客不来。空庭花落没蒼苔。欲留流景怕無策。猶等佳人念未灰。身老尤宜居世外。雲閑只合臥巖隈。午眠一覺茶三椀。望斷千峰推闥開。

〔訓〕友人を憶う。

山院春深くして客来たらず。空庭花落ちて蒼苔没し。流景を留めんと欲すも怕らくは策無し。猶お友人を等て念未だ灰にせず。身老いては尤も宜しく世外に居すべし。雲閑かにして只だ合に巖隈に臥すべし。午に眠り一覺して茶三椀。千峰を望断して闥を推して開かん。

○掲載書籍：「大正蔵八一・一〇二b」〔訓註本上・四六〕。○山院：山寺。○空庭：人気がないものさびしい庭。○蒼苔：青々とした苔。○流景：流れ去ってしまう景色。落日のけしき。夕日。○怕無：恐無と同じ。○佳人：すばらしき人。○千峰：多くの峰。多くの山々。○念未灰：まだ念頭から消え去らないという意。○世外：塵世の外。世俗の外。○巖隈：岩の曲がり込んだところ。○望断：遠くてはつきりみえない。はるか遠く見えなくなるまで見続ける。人を思念するたとえに用いられる。○闥：ぐぐり門。小門のこと。○茶三椀：「補1」。

〔訳〕友人を憶う。

山院（山寺）では春が深くなっても客（友人）は来ない。人気がない庭に花が落ちて青々として苔をかくしている。移り変わる景色を留めようと願うがおそらくその手立ては無い。それでもなおすばらしき人（友人）を待ちその思いは衰えない。体が老いたら世俗を離れるのが最も相応しい。雲は閑かにただ巖の隅に横たわっているべきだ。午に眠って覚めてから茶を三椀飲んだ。（友人の来訪を願い）千峰を遠く望んで門を押して開こう。

【眠気覚まし】 【茶三椀】 昼寝の後、寝起きに茶を三椀飲んでゐる。おそらくは覚醒を促しているものと思われる。ただし、禅僧は日常的に茶を飲んでゐるため、眠気覚ましとしての効能を期待して飲んだために、三椀が必要になつてゐるものと思われる。

【補注】

（一） 茶三椀…『景德伝灯録』卷十二の吉州資福如宝禅師章に「問、如何是和尚家风。師曰、飯後三椀茶」（大正藏五一・二九八c）とあるを踏まえるか。

【寂室3】『永源寂室和尚語』上「偈頌」

摘茶

枝頭葉底著精神、無限芬芳遠襲人。体用之中収不得。一籃漏泄十分春。

【訓】 茶を摘む。

枝頭葉底精神を著けば、限り無き芬芳遠く人を襲う。体用の中収めるも得ず、一籃漏泄す十分の春。

○掲載書籍：「大正蔵八一・一〇二b」【訓註本上・四八】。○摘茶…一山総出の普請で茶を摘んだことに因む偈頌。

○著精神…しつかりやる。○芬芳…よい香りをただよわせること。○体用…本体と作用【補1】。○籃…竹や柳の枝、籐などを編んで作つた取つ手のついた容器。かご。○漏泄…もれる。しみとおる。

【訳】 茶を摘む。

【茶樹の】 枝の先と葉の付け根にまで気持ちをごらして茶を摘めば、限り無き【茶の】 良い香りは遠くの人にもでも広がる。【瀉山と仰山の摘茶の問答の】 本体と作用は収めようにもできず、【茶を摘んだ】 籠から漏

れ出しているのは満ち足りた春ではないか。

【永源寺での茶の栽培】【政所茶】【越溪茶】茶の香りは仏心のたとえでもあり、その仏心は気持ちいをこめて修行すれば、本体や作用にも収まりきれず、世界全般に広がることを、茶摘みが行われたことを踏まえて読んだもの。茶を摘んだ時の偈頌が残されているため、永源寺やその周辺で茶が栽培されていたと考えられる。普請での摘茶が行われたのであろう。寂室は摘茶を重要な修行の一つと考えているが「寂室11」、自身が東福寺での摘茶の際に禅僧に見出されたことによる「寂室13」。江戸時代には、永源寺やその周辺の茶は越溪茶、政所茶として知られるようになる。また、『寂室和尚語録』巻下「説」「越溪」によれば、越溪は「然面無_レ矜伐之色」、口絶_二勞苦之言_一。只疾_二世情之爛似_レ泥_一。凶_二吾道貌清如_レ水而已_一。一日袖_レ紙需_二別称_一、因号_二越溪_一者、蓋越之若耶溪天下勝概」（大正蔵八一・一二三a）とあり、その道貌を清くありたいと願っていた秀格に対して寂室元光が与えたもので、越州（浙江省）若耶溪に因む。また、『寂室和尚語録』「法語」「示秀格禪人」には「蒲団竹椅之上、良不_レ在_レ言也。採_レ薪拾_レ菓鋤_レ圃汲_レ溪処正好、参究底時節」（大正蔵八一・一二九b）とあり、寂室元光は越溪秀格に禅寺における作務こそ、参究するに相応しい修行であるとして、作務の大切さを説いている。

〔補注〕

- (1) 体用…『聯灯会要』巻七の瀉山靈祐章に「師摘_レ茶次、謂_二仰山_一云、終日摘_レ茶、只聞_二子声_一、不_レ見_二子形_一。仰撼_二茶樹_一。師云、子只得_二其用_一、不得_二其体_一。云、未審、和尚如何。師良久。仰云、和尚只得_二其体_一、不得_二其用_一。師云、放_二子三十棒_一」（続蔵一三六・六五a～b）とある問答を踏まえる。

「寂室4」『永源寂室和尚語』上「偈頌」

戊午仲春借榻於東禅之客欄作涉句之留。偶遊花岳庵訪于心公法兄。觀其韜鏢之韻致幾乎追配瓊亮之高風也。愚謾遊江湖垂二十載。以未獲歸休之計為愧矣。紫栗青鞋他日重来。從公乎水辺林下非愚誰歟。因述俚語紀其志云耳。

（三首、中略）

潤水旋添茶鼎湯。山花時助石樓香。破蒲団上無余事。又見林巔掛夕陽。

〔訓〕戊午仲春借榻を東禅の客欄に借りて涉句の留りを作す。偶たま花岳庵に遊んで心公法兄を訪ずぬ。其の韜鏢の韻致を觀るに幾乎んど瓊・亮の高風を追配す。愚謾りに江湖に遊んで二十載を垂るも、未だ歸休の計を獲ざるを以て愧と為す。紫栗・青鞋他日重ねて来たらん。公の水辺林下に従うは愚に非らざれば誰か。因りて俚語を述べ其の志を紀すのみ。

（計四首中、三首中略）

潤水旋に添うるは茶鼎の湯、山花時に助く石樓の香。破蒲団上に余事無し、又た林巔の夕陽を掛くるを見る。

○掲載史料：「大正蔵八一・一〇三C」〔訓註本上・九〇〕。○借榻：他人の寢床を借りて眠ること。○東禅：東禅寺。〔寂室抄〕に「濃州」とある。現在、美濃（岐阜県）に東禅寺があるが、この現在の東禅寺と『寂室録』の東禅寺が同一のものかは不明。○花岳庵：花岳山吉祥寺（大徳寺派）が永源寺より数km離れたところにあり（可児郡御嵩町古屋敷）、その前身に当たるか。○涉句：十日以上。○韜鏢：鞘光鏢彩。自分の才能や功績、地位などを包み隠して、他人に知られないようにすること。○韻致：洗練された風雅なおもむき。○瓊・亮：南岳明讀和尚と西山亮座主のこ

と。隱士として知られる。○江湖：漢語としての一般的な意味は、世間。世の中。民間である。禪林の用語としては、江は揚子江、湖は洞庭湖をさし、唐の馬祖道一は江西に住し、石頭希遷は湖南に住し、各法幢を建てて禪風を挙揚した当時、雲水の僧徒が江西・湖南に集まった。このことから、雲衲の集まる所を江湖という。○紫栗・青鞋：粗末な法服と草鞋。○澗水：谷川の水。陸羽『茶經』に「其水、用山水上、江水次、井水下」とある。○旋：副詞。ほしいままに。思うままに。○茶鼎：鼎の形をしている茶釜。陸羽『茶經』に「風爐、以銅鑄之、如古鼎形」とある。○石樓：石の樓台。○山花：山の花のことではあるが、ここでは山中で生活する寂室自身をたとえたものか。○破蒲団：破れた蒲団。蒲団は坐禪の敷物で、蒲団を坐り破るほど修行をするたとえ「補1」。○林巔：こずえの先。○石樓香：香山に石樓を構えた白居易のことを踏まえる「補2」。

〔訳〕戊午の年の仲春に私は東禪寺の客棟の一室を借り、十数日にわたる逗留をしていた。たまたま花岳庵に遊びに行き、法兄である心公を訪ねたところ、才や功績を隠されつつも洗練された風雅なおもむぎに、ほとんど南岳明讚和尚や西山亮座主の清らかな高風を思わせるほどであった。愚かなる私は、江湖を漂泊することすでに二十年になろうとしているが、なお隠棲して身を休める方法を得られないことを恥じている。粗末な紫の法衣に青い草鞋を履き、いつの日か再びここを訪れたい。公の水辺・林下の清境に従うのは私でなければ一体誰であろうか（私しかあるまい）。ここに私の拙い言葉を述べて、その志を記しておくのみである。

（計四首中、三首中略）

思うままに山泉を汲んで茶鼎にくわえれば、山花はときおり石樓の香を助けてくれる（山居への気持ちがあふれてくる）。破れた蒲団の上にただ坐禅していたら、いつの間にか木々の梢に夕陽がかかっているではないか。【入室の際の茶】【茶話】【茶鼎】寂室元光が、美濃の東禪寺に遊行した際、心公法兄に入室し、そこで茶話したものだと思われる。各地の禪寺に茶は必ずあるものであり、方丈に入室すれば茶が出され、あるいは問答

し茶話することが行われた。このような光景は、中世の禅寺の日常的な状況であった。茶を飲んだあと、ただ坐禅をしていたらすっかり日が暮れていたのである。

〔補注〕

（一）破蒲団…『五灯会元』卷七の福州長慶慧稜章「杭州塩官人也。姓孫氏。稟性淳澹。年十三於蘇州通玄寺出家登戒。歷參禪苑。後參靈雲問、如何是仏法大意。雲曰、驢事未去、馬事到来。師如是往來雪峰・玄沙二十年間、坐破七箇蒲団、不明此事。一日捲簾、忽然大悟」（統藏一三八・一五二c）。

（二）石楼香…香山に石楼を構えた白居易のことを踏まえる。『新唐書』卷一九「白居易伝」に「与弟行簡、從祖弟敏中友愛。東都所居履道里、疏沼種樹、構石楼香山、鑿八節灘、自号醉吟先生、為之伝。暮節惑浮屠道尤甚、至経月不食葷、称香山居士。嘗与胡杲、吉旼、鄭勗、劉真、盧真、張渾、狄兼謨、盧貞燕集、皆高年不事者、人慕之、絵為九老図。（中略）後履道第卒為仏寺。東都江州人為立祠焉」とある。『五灯会元』卷十五の明州育王山懷璉大覚禪師章に「治平中上疏丐帰。仍進頌曰、千簇雲山万壑流。閑身帰老此峰頭。余生願祝無疆寿。一炷清香満石楼。英廟依所乞、賜手詔曰、大覚禪師懷璉受先帝聖眷、累錫宸章。屢貢誠懇。乞帰林下。今從所請、俾遂閑心。凡経過小可庵院、任性住持。或十方禪林、不得抑逼堅請」とある。大覚禪師懷璉が山居を皇帝に願つた際の上奏文の偈頌に、白居易を踏まえた「一炷清香満石楼」があり、これを受けて、懷璉は詔にて山居を許された。寂室元光の「山花時助石楼香」はこれを踏まえたもの。

〔寂室5〕『永源寂室和尚語』上「偈頌」

与翼姪訪石塔客居

道人踏雪問寓舎。月照寒窓坐対床。瓦鼎烹茶春一盞。豈同政老橘皮湯。

〔訓〕翼姪よくてつの石塔せきとうの客居あかに訪うに与う。

道人どうじん雪を踏んで寓舎ぐうしゃを問う。月寒窓かんそうを照らして坐して床しょうに対す。瓦鼎がてい茶を烹て春一盞。豈に政老せいろうの橘皮湯きつぴとうに同じからんや。

○掲載書籍：「大正蔵八一・一〇五b」〔訓註本上・一四六〕。○翼姪：詳細は不明である。「姪」は法姪のこと、同門の僧侶のことを指す。この場合は師翁の蘭溪道隆の系譜に属する僧のこと〔補1〕。○石塔：石塔教寺。滋賀県の天台宗寺院である阿育王山石塔寺のこと。寂室元光が延文四年（一三五九）の七十歳の時に寓居した。『紀年録』七十歳条を参照。○客居：旅先での一時的な住まい。○道人：仏道を実践する人。この場合は、翼姪を示す。○床：刊本には「牀」とある〔補2〕。○瓦鼎：茶鼎のこと。○政老：法眼宗の惟政（九八六〜一〇四九）のこと〔補3〕。○政老橘皮湯：彼が客人に橘皮湯を勧めた故事がある。橘皮湯は蜜柑又柑橘の皮を煎じる湯のこと〔補4〕。

〔訳〕翼姪が石塔寺の仮住まいを訪れたときに与えた偈頌

仏道修行中の翼姪が雪路を踏んで、石塔寺を訪ねてきた。月が寒い窓を照らす中で禅床に向かつて坐っている。茶鼎で茶をいれば春一杯であり、惟政和尚の〔葉石代わりの／大変清らかな〕橘皮湯とどうして同じであろうか、いやない（より素晴らしい）。

〔補注〕

（一）翼姪：『永源寂室和尚語』上に「翼姪請」「似則固似。是則未是。離相離名、非彼非此。歷劫何嘗現全體」がある。ちなみに、翼姪が大覚派の僧であるならば、「翼姪請」は『蘭溪和尚語録』卷上「建長寺語録」に「上堂。六月炎烝。何処彈避。清涼境界、無人至。英靈衲子別有生涯、不借他家鼻孔出氣。雖然更須冷汗一回。任使熏天炙地。到這裏似則也似、是則未是。何故、日行千里非良驥」（蘭溪全一・二二）を踏

まえるか。

(2) 床…禅籍で登場する「床／牀」は、一般的には「禅牀」であり、禅倚や坐禅する場所のことを指す。ただし、古典を踏まえていた場合、机を意味する場合がある。たとえば、鈴木旦「中世禅僧の詩に表現された書院窓」(『建築史学会』四十三、二〇〇四年)では、この『永源寂室和尚語』の事例を「書窓の机を床と記す初期の例である」と指摘する。茶は机で飲むものという先人観から、このような指摘があつたものと想定されるのである。ただし、机としての用例と考えられる場合、ほとんどは「書」とともに登場するのであり、現時点ではこの事例をもつて「床」を「机」としての意味で禅林で用いられた事例とは認められない。中世の禅林における茶礼や茶の湯の時代まで、茶は禅床(ゆか)に置かれていたのであり、本論ではそのような事例にならつて、ここでも「床」は、坐禅をする「禅床(禅牀)」を意味するものと理解したい。この時代の坐禅は面壁であるが、食事をする際や茶を飲む際は通路側を向いて座り、浄縁と呼ばれる坐禅をする場所の前にある木製の場所に、食や茶を置いて飲食する。教寺での寓居中ではあるが、この時代の茶礼に机を使つたものは伝えられていないことは踏まえらるべきであろう。

(3) 政老…法眼宗の惟政(九八六～一〇四九)のこと。秀州の人。天台山で三観を学んだ後、径山の惟業に参じてその法を嗣ぐ。臨安(浙江省)功臣山の浄土院に住する。官人の帰依を受けたが、訪問にあつて常に牛に乗つて出かけたため、政黄牛と称された。

(4) 政老橘皮湯…『五灯会元』卷十の杭州浄土院惟正章に「九峰韶禅師嘗客於院。一夕将臥。師邀之曰、月色如_レ此、劳生擾擾。对_レ之者能幾人。峰唯唯而矣。久之呼童子使_レ熟炙。峰方饑、意作_レ菓石。頃乃橘皮湯一杯。峰匿_レ笑曰、無乃太清乎」(続蔵一三八・二二〇a)とある。また、『宗鏡録』卷七十一「明旦、邊有_レ詔命。既对。適遇。太官進_レ食。糕糜一器。上以其半。賜_レ晋公。晋公食_レ之美。又以賜_レ之。既退而腹脹。歸_三于私第_一、召_レ医視_レ之。曰、食物所_レ壅。宜服_三少橘皮湯_一。至_レ夜可_レ飲_レ漿水。明旦、疾愈。思_三前吏言_一召_レ之。視_レ其書云、明晨相公只食_三一飮半糕糜_一。橘皮湯一碗。漿水一甌。則皆如其言」(大正蔵四十八・八一五c)とあり、食べ過ぎの薬と

しての服用法もあつたようである。

【入室の際の茶】【茶話】【瓦鼎】寂室元光が石塔寺に仮住まいをしていた際、尋ねてきてくれた「翼姪」に茶を入れている。重要なことは、仮住まいであつても茶をいれる準備が整つてゐることである。この時代には、客人にいれる茶はすでに必須のものとして考えられていることがわかる。この日の茶一杯は菓石代わりでありつつ、大麥清らかな橘皮湯よりも遙かにすばらしい、それそのものが「春」であることを詠んでいる。

「寂室6」『永源寂室和尚語』巻下「小仏事」

特峰和尚拈香

恭惟〈某人〉仏通的伝英裔、大福中興主盟、提唱宗乘也。雷馳電激、崖崩石裂、居常懷抱也。氷枯霜烈、雲閑水清。咸謂龍淵復興波浪。慧日重增高明。自從一回仮示生滅之相。至今雲愁霧慘。鬼哭神驚。老拙昔年俱在巨福山中。肩摩衫属風前月下同坐同行。悔不与他道著末後句。今日狹路相逢。不免借水獻花去。〈挿香云〉沈水一炉茶一盞。黃梅時節雨慳晴。

【訓】特峰和尚の拈香

恭しく惟れば〈某人〉仏通的伝の英裔、大福中興の主盟にして、宗乗を提唱するなり。雷馳せ電激し、崖崩れ石裂け、居常の懷抱なり。氷枯れ霜烈しく、雲閑かに水清し。咸な謂う、「龍淵復た波浪を興こし、慧日重ねて高明を増す」と。一回仮に生滅の相を示してより今に至るまで、雲愁い霧惨み、鬼哭き神驚く。老拙昔年俱に巨福山中に在りて、肩摩り衫属ね、風前月下、同坐同行す。悔ゆらくは他の与に末後の句を道著せざることを。今日狹路に相逢う。免れず水を借りて花を獻じ去ることを」と。〈香を挿んで云う〉沈水

一 炉茶一盞。黄^{おうばい}梅の時節、雨晴るるを慳^おしむ。

○掲載書籍：「大正蔵八一・一一八c」「訓註本下・八四」。○特峰和尚：癡兀大慧の弟子か。詳細は不明「補1」。

○拈香：拈香文の略。拈香の後、死者に哀悼の意を表して朗読する文のこと。○某人：姓名を伏せる場合や正名を省略する場合に用いる。○仏通：臨済宗聖一派の癡兀大慧（仏通禪師、一二二九～一三二二）のこと「補2」。○的伝：嫡伝。嫡子から嫡子へ次第に伝えること。正統に受け継がれていること。○英裔：英俊な裔子（子孫）の略。すぐれた法孫。○大福：瑞雲山大福寺のこと「補3」。○中興：宗門及び一寺を再興すること。また、その任に当たった人のこと。○主盟：ここでは住持のこと。○宗乘：宗門（禪門）の教え。○雷馳電激：「電激」いなづまのようにはげしくおこる。雷鳴が走り電光が激しくおこること。厳しく鋭いことのとえ。○崖崩石裂：威勢はなはだしく、何人も寄り付けない俊烈なさまのとえ。○居常：つねひごろ。平常。○懷抱：思い考える。○水枯霜烈：高潔で厳格なさま。○雲閑水清：雲がゆったりと流れ、水が清く澄んでいること。行脚僧を意味する雲水に掛かっている。○龍淵：龍が棲む深いふち。径山万寿寺（浙江省余杭県）の方丈額を龍淵室と言う（『扶桑五山記』卷一）。それ故に寂室元光は、円爾の法孫である特峰和尚の拈香法語で「龍淵」の言葉を用いた（無準師範—東福円爾—癡兀大慧）。○復興波浪：再び波しぶきを立たせるといふ意。無準和尚の禅法を再び興隆せしめる旨をいう。「龍淵」に掛かっている。○恵目：仏の智慧を日光が世界をあまねく照らすのにたとえている。東福寺の山号。ここでは東福寺開山聖一國師を派祖とするその一門を指す。○重増高明：重ねて高々と光明を輝かすこと。○仮示生滅之相：本来不生不滅であるが、方便力によって仮に生滅の相を現わすこと。○雲愁霧慘：悲しくもの寂しいさまを形容する。○鬼哭神驚：鬼神さへも泣き悲しむこと。極度の悲痛を形容する。○老拙：自分をへりくだっている語。ここでは寂室元光の自称。○巨福山：鎌倉建長寺の山号。ここでは建長寺のこと「補4」。○肩摩衫屬：肩が触れ合い衣服を連ねる。大衆として同参であつた旨をいう。○風前月下：風吹く月明かりの下での意。○同坐同行：共に坐禅経行に努めたさま。○道著：言い切る。言い当てる。○末後句：多くの場合は遺偈を指すが、ここでは寂室元光が特峰和尚に最後にたむける言葉の

意。○狹路相逢：狭い道で出逢う。逃げ場のない状況。○借水献花：仏前に供えてある水を借りて花を献じる。得難い機会を逃さないようにすること。○挿香：香を焚く。○沈水：沈水香のこと。水面に置けば沈んでしまうので、沈水香と名付けられた。○一炉：一たび焼香すること。○下句：約翁徳儉が寂室元光の帰郷に際して送った偈頌『約翁和尚語録』巻下「送元光侍者帰郷」「到家句子忽閑情、一錫薫風遠問程。三喚声前如会得、黄梅時節雨慳晴」の結句のこと。○黄梅時節：梅の実が黄色く色付く梅雨の時節。○雨慳晴：雨が続き晴れ間が少ない。雨の降り続くさま。

〔訳〕謹んで思うに特峰和尚は、仏通禪師（癡兀大慧）のすぐれた法孫にして、大福寺中興の住持であり、禅の教えを提唱していた。「その教えは」雷や電光のようになるとく、崖は崩れて石が裂けるほど「で人を寄せ付けない厳しさ」であり、日頃の心中はこのようであった。水のように枯れ、霜のようにはげしく「厳格であり」、雲の如くに静かで水の如くに清らかであった。誰もが口をそろえて言う、「龍淵（無準師範の禅法）が再び波を起こし（て仏法を興隆し）、慧日（聖一派）がますます光輝くであろう」と。ひとたび仮に生死の相を示してから今に至るまで、雲は憂いを帯び霧は哀愁に満ち、鬼神さえ泣き悲しんでいる。私はその昔、共に巨福山（建長寺）にて、肩をすり合わせ、衣の袖を寄せ合つて、風そよぐ月明かりの下、ともに坐禅修行に励んだ。心残りには、特峰和尚に最後の一句を言っておかなかったことだ。今日は思いがけず「特峰和尚にお会いできたので、水を借りて花を献げざるを得ないのだ」と。香を焚いて云う、「沈水香一片を炉にくべて焼香し、茶一杯を供える。梅の実が熟する〔梅雨の〕時節、〔私の涙は枯れず〕雨は降り続いていく」と。

〔補注〕

（１）特峰和尚：「寂室抄」は、「此東福門徒仏通弟子、大福寺住持、中興開山ナルヘシ」と痴兀大慧の直弟子と見
なすが、「元禄本」頭註には、「特峰。未詳。古抄東福痴兀大慧、嗣聖一。諡仏通。其嗣有「大福嶺翁寂雲」。想特
峰其後歟。宗派不_レ載_レ之」とあり、仏通禅師の法孫と見る。この「大福嶺翁寂雲」は、大福寺開山仏通禅師の法
嗣で、仏通禅師の後席を継いで大福寺に住し、真福寺文庫所蔵「菩提心論隨文正決」奥書により、元徳元年（一
三二九）ごろまでは大福寺を住していた（真福寺文庫所蔵「菩提心論隨文正決」奥書）。この「拈香」によれば、
嶺翁寂雲の後に、特峰が大福寺の住持になったと考えられる。

（２）仏通：臨済宗聖一派の癡兀大慧のこと。伊勢（三重県）の人。平清盛の後裔という。叡山に出家して、密教に
通じた僧侶であった。円爾に参じた後に改衣して、後に円爾の法を嗣ぐ。伊勢に長松山安養寺、瑞雲山大福寺の
開山、東福寺第九世となる。『東福仏通禅師十牛訣』『枯木集』がある。仏通禅師と諡す。

（３）大福：瑞雲山大福寺のこと。『大慈庵仏通禅師行状』に「曾在勢州。開山於両寺。曰「安養」〈号「長松山」〉。
曰「大福」〈号「瑞雲山」〉と伝える。大福寺はその後、仏通禅師の弟子嶺翁寂雲が開山した太平山無量寺（三重
県伊勢市小俣町）の末寺となり、慶長年間（一五九六～一六一五）以前に廃寺となったと考えられている。

（４）巨福山：巨福山建長寺のこと。神奈川県鎌倉市山ノ内にある臨済宗建長寺派の本山。山号は巨福山、本尊は地
蔵菩薩、開基は北条時頼、開山は蘭溪道隆。建長元年（一二四九）に創建された。蘭溪道隆以降、兀庵普寧・大
休正念・無学祖元などが住した。暦応四年（一三四二）八月二十三日、室町幕府によって鎌倉五山の第一位に列
せられて今日に至る。

【祖師忌の献茶】かつて共に修行した仲間に対して、忌日に法要を行なったもの。法語の内容から、献茶が
行われたことがわかる。禅僧の葬送儀礼や迫害の仏事に際して、焼香とともに、茶が極めて重視されていた
ことがわかる。

「寂室7」『永源寂室和尚語』下「説」

石澗説

余性喜遊山水之間。一日飯罷、拉同志兩三輩、入屋後山、從樵徑行殆乎數里。松風吹耳空翠湿衣。忽見一洞壑、幽邃崕岬、陰風凜凜。老木交枝、古藤垂蔓。兩岸對峙、如側翠屏。中有巨石、高丈余許。屹然特立、若削青鉄。硤礪礪怪奇可觀。澗沢被物草木華滋。溪山明媚。蓋疑内含美玉而乃致然乎。下有澗泉色似揆藍。泓然激灑浸爛雲根。瞪目俯臨令人心寒股慄而已。亦恐有靈物蜿蜒於茲歟。余聊有感懷。即謂同志曰、坐吾語汝。古隱士夏揖塵世、遠尋雲山、棲遲空谷之中、考槃寒溪之上。守志堅確、天翻地覆不移不轉。心源淵深、歲積月累、弥清弥澄。唯羞世人知住处、亦恐声名流江湖。而今回觀石澗、与古隱士之道貌頗相逼似也。汝意謂何如。同志弘袂起咲曰、老夫実耄耶。若但謂酷愛彼石澗天生清絶佳致、則良以可也。引古隱逸偷庸比倫、何其言之訛戢如是。豈復非好事者哉。余失所對赧面而休。夕陽已懸木末、相呼而歸。翌旦泉姪來相訪。瀟茗同啜。次話及乃事。泉云、或号吾石澗靡識所由。正欲來從老夫而聞其説。幸希記山中所見所語。在石澗字尾矣。余曰、前所言者是同志所捨。汝用是奚為。泉云、彼已非我。我亦非彼。彼我各異、用捨寧同。余不獲已援毫書贈云。

〔訓〕石澗説

余の性は山水の間に遊ぶことを喜ぶ。一日飯罷りて、同志兩三輩を拉きて、屋後の山に入り、樵徑より行くこと殆乎んど数里なり。松風耳を吹き、空翠衣を湿す。忽ち一の洞壑を見るに、幽邃崕岬にして、陰風凜凜たり。老木枝を交え、古藤蔓を垂る。兩岸對峙して、翠屏を側てるが如し。中に巨石有り、高きこと丈余許り。屹然として特立し、青鉄を削るが若し。硤礪礪として怪奇觀る可し。澗沢物に被らしめて草木華滋し。

溪山明媚たり。蓋し疑うらくは、内に美玉を含んで、而も乃ち然ることを致すや。下に潤泉有りて、色藍を
 扱むに似たり。泓然激澗として雲根を浸爛す。瞪目して俯して臨む、人をして心寒く股慄かしむのみ。亦た
 恐らくは靈物有りて茲に蜿蜒たるか。余聊か感懷有り。即ち同志に謂いて曰く、「坐りて吾汝に語らん。古
 の隱士復か塵世を捐り、遠く雲山を尋ね、空谷の中に棲遲し、寒溪の上に考槃す。志を守ること堅確にして、
 天翻し地覆すも移さず転ぜず。心源淵深にして、歲積月累ぬれば、弥々清く弥々澄まん。唯だ世人の住処
 を知るを羞じ、亦た声名の江湖に流るるを恐る。而今石澗を回觀すれば、古の隱士の道貌と頗る相逼似なり。
 汝の意は何如と謂わんか」と。同志袂を払い起きて咲つて曰く、「老夫実に耄せるや。若し但だ「酷だ彼の
 石澗の天生・清絶・佳致を愛す」と謂わば、則ち良に以て可なり。古の隱逸を引き儉に庸いて比倫せば、何
 ぞ其の言の骯骯たること是の如し。豈に復た好事者に非ざらんや」と。余は對うる所を失して赧面して休す。
 夕陽は已に木の末に懸かり、相呼んで帰る。翌旦泉姪来りて相訪う。茗を瀹て共に啜る。次いで話は乃ち事
 に及ぶ。泉云く、「或は吾の石澗と号すること所由を識らず」と。正に來りて老夫より其の説を聞かんと欲
 す。幸いに希わくは山中の所見所語を記す。石澗の字尾在るか」と。余曰く、「前に言う所は是れ同志の捨
 つる所なり。汝是れを用うるは奚と為す」と。泉云く、「彼已に我れに非ず。我れも亦彼に非ず。彼我各お
 の異なり、用捨寧んぞ同じからんや」と。余已むを獲ずして毫を援りて書して贈ると云う。

○掲載書籍：「大正蔵八一・一二三b」「訓註本下・一九三」。○石澗：石の多い谷川「補一」。洞窟の名であり、道
 号でもある。○飯罷：昼飯を終えたあとすぐ。○拉：引き連れる。○樵徑：きこりが通う山道。○殆乎：ほとんど、
 およその意味。○数里：室町時代の一里は、五町（約四五五m）から六町（約六五五m）とされる。○松風：松を吹
 く風。○空翠：滴るやうな緑色を呈すること「補2」。○濕衣：湿った衣服。濡れた衣服。○洞壑：ほらあなと谷。

ほらあな。○幽邃…静かで奥深い。幽深。幽遠。○嶺岬…山の深いさま。○陰風…冬の風。北風。逆風。○凜凜…寒さがしみるさま。○屹然…山のそびえたつさま。独立して屈せぬさま。屹屹。毅然。○青鉄…青味を帯びた鉄。○砒礞…岩や崖が険しいようす。○礪礞…平らでない岩石。○潤沢…うるおう。うるおす。○被…あまねく満ちる。○滋(茲)…草木がふえそだつ。しげる。○明媚…鮮やかで美しいさま。○揆…手でもむ。こする。○藍…タデ科の一年草。葉から藍色の材料をとる。藍色。○泓然…奥深く広がっているさま。○灑浸…水のあふれるさま。○浸爛…浸は侵食の意で、爛はくずれてぼろぼろのさま。水によって洞窟内の岩が侵食されてぼろぼろになっている様を指している。○雲根…雲は岩石の間から生ずるので岩の根、岩盤。○瞪目…驚いたり、あきれて目を見張る。○靈物…神靈。鬼神。妖怪。○蜿蜒…蛇や龍などがくねくねと進むさま。○揖…ゆずる。辞退する。遠慮して辞退する。○棲遲…のんびりして暮らす。人目につかぬ所で安らかに暮らす。隱栖すること。○考槃…こうはん。隱栖の室を作り、己の思うままに楽しみをなすこと。『詩経』「衛風・考槃」「考槃在澗、硯人之寛」による。○堅確…かたくたしか。○天翻地覆…天ひるがえり地くつがえる。天地がひっくり返る。○心源…心。心の本性。心の本源。清淨心。真実心。○江湖…漢語としての一般的な意味は、世間。世の中。民間である。禅林の用語としては、江は揚子江、湖は洞庭湖をさし、唐の馬祖道一は江西に住し、石頭希遷は湖南に住し、各法幡を建てて禅風を挙揚した当時、雲水の僧徒が江西・湖南に集まった。このことから、雲衲の集まる所を江湖という。○回觀…ふりかえり見る。○道貌…道德ある相貌。ここでは風格。○逼似…逼肖。酷似する。○老夫…寂室和尚のこと。○耄せる…老いること。○天生…天が物を生ずる。生まれつき。天賦。○清絶…非常に清らかなこと。○佳致…自然の景色のよい趣・風情のこと。○隱逸…世の中をかくれのがれる。また、その人。隱者。○比倫…比べる。匹敵する。○軌轍…まがる。屈曲する。表現が回りくどいことを言う。○好事者…物好きな人。物事に深く心を寄せる人。○赧面…赤面。顔を赤らめるさま。きまりが悪いさま。○姪…法姪。石澗泉という名の禅僧。○澹茗…茶をいれること「補3」。○老夫…老夫は本来は自分を指す一人称である。泉姪の言葉としては不自然な表現であるが、寂室はこの語を含む文言を泉姪に書して与えるに際し、泉姪が寂室を呼んだ敬称を、自らを指す一人称「老夫」へと改めて記したのである。○奚為…どうしてゝなのか。○援

毫：筆を執る。

〔訳〕私の性格は山水の景色を遊行することを喜ぶものだ。ある日、昼の食事を終えてすぐに、志を同じくする三人の仲間を連れて、お寺の裏山に入り、薪を運ぶ山道をたどっておよそ数里の距離を行った。松の風は耳元で音を奏で、山に満ちる滴るような翠が衣服を湿らせているかのようにではないか。突然現れた洞窟を見ると、奥深く幽玄で険しくえぐれたような地形に、冷やかな風が吹いていた。〔洞窟の前では〕老木の枝が入り組み、古藤の蔓が垂れ下がっている。〔洞窟の〕両側の崖は翠色の屏風のように向かい合う。その中に巨大な岩があり、丈余（約三m）の高さでそびえ立ち、まるで青みがかった鉄を削り出したようであった。今にも崩れてきそうだが恐ろしくも珍しい姿は見るに値する。潤いはすべてに恵みを与えて、草木も咲き誇っている。だから谷も山も鮮やかに美しい。もしかしたら、本当は巨石の中に美しい玉があるからこのようにすばらしい景色になっているのではないか、と思ってしまうほどだ。洞窟の中の下には谷の水が流れていて、その色は藍を手でもんだようである。川は奥深く、水が満々と流れ込んで岩盤を浸して崩し、その根元まで濡らしていた。驚いて見下ろせば、足が震えてしまうほどであった。この川には、あるいは神霊の龍がいて、くねくねと動いているかのようだ。私は少しばかり思うところがあつて同志にこう言った、「坐つてあなたと語りたい。古の隠者は長らく俗世をはなれ、遠くの雲山を尋ね、深谷の中に隠棲し、寒々しくも清らかな小川のほとりに住まいを構える。隠棲する志はかたく、天地がひっくり返つても動じない。月日が積み重ね、奥深い心はいよいよ清くますます澄みとおるようになる。ただ世人に住処を知られるのを嫌い、名が世間に流れるのを恐れる。今、この石澗を振り返りみれば、まるで古の隠者の〔住まいの〕ようではないか。あなたはいかが思われるか」と。同志は袖を払つて〔勢いよく〕立ちあがり笑つて言つた、

「和尚、老いられたのではないですか。もし「ただこの石澗の天然で大変清らかなおもむきを愛しているのだ」とおっしゃるだけならば、まことに結構なことです。「しかしながら」、古の隠者「の住まい」をわらないようにして引き合いに出し、石澗と比べているのなら、なんと回りくどい言葉でしょう。それは単なる物好きのお言葉ではありませんか」と。私は返す言葉もなく赤面して話を打ち切った。夕陽も既に枝の先に懸かつており、お互いに声を掛け合つて帰った。翌朝、泉姪が私を訪ねてきた。お茶をいれて一緒に飲み、次に前日のことに話が及んだ。泉が言う、「私は「石澗」と号するがその由来を知りません。そこで、先生（老夫）にその話しをお聞きしたく参りました。どうかお願いいたします、山中で見聞きしたことや考えたことお示しください。石澗には究極的な意味があるのでしょうか」と。「寂室は」「前に言ったことは、同志が捨てたものだ。君がそれを使うのは何のつもりか」と聞いた。泉は答えた、「同志は私ではありません。また私も彼ではありません。彼と私はそれぞれ異なる、何を用いるか捨てるかはどうして同じことがあろうか」と。私はやむをえず筆を取つて書いて贈つた。

【入室の際の茶】 【客僧への茶】 【茶話】

寂室は三人の同土を連れて石澗という洞窟に行く。そこで、「かつて石澗と号した」一人の同土と隠居したい旨を暗に話すが、軽くあしらわれる。翌朝、「かつて石澗と号した」同土の弟子である泉姪が永源寺にやつてきたので茶を一緒に飲んだ。そして、同土の弟子は自分も石澗と号することを話し、その由来を教えて欲しいと願う。同土から「石澗」洞窟での話を聞いてくるように言われたのである。いづれにしても、若い禅僧が尋ねてやつてきた際に禅僧が茶をいれ、ともに茶を飲んでから深い話に至った、中世禅林の具体的な一場面が漢詩の中に記されている。

〔補注〕

（1）石洞：石の多い谷川を意味する「石洞」と名づけられた洞窟のこと。洞窟の名であり、道号でもある。現在でも場所の特定には至っていないが、永源寺から四、五km離れたところに、「奇人の窟」と呼ばれる日本コバの登山ルート上にある岩屋がある。登山者などの写真を見ると、この岩屋の特徴と「石洞」の特徴に共通点が見られる。

（2）空翠：滴るような緑色のこと。王維「荆谿白石出、天寒紅葉稀。山路元無雨、空翠溼人衣」を踏まえる。

（3）瀹茗：茶をいれること。瀹茗や煎茶はもとは煮ることを意味する漢字であるが、これは本来団茶という喫茶法が茶葉を煮て作ることに由来するものであり、瀹茗、煎茶で茶をいれることそのものを意味するようになった。そして、喫茶法が変化しても言葉そのものは瀹茗や煎茶として残ったのである。したがって、瀹茗とあっても必ずしも茶を煮ているわけではないことには注意が必要である。そこで、本論では茶をいれるとして訳している。

〔寂室8〕『永源寂室和尚語』下「書簡」

又〔答実翁和尚〕

越弟来出示所賜手教。焚香繙閱仍審。此日道福兼昌興寢清勝、忻慰無已。細味来論、区区痛責愚林下掩閑懶於趨世。又云、風雲際会、以膺峻擢。夫何見期太過。何以敢当。自非厚荷存撫、則安得到於此耶。靡勝銘感之至。愚壯歲随衆之日、東西班牙列尚以不敢措意、何況大焉者乎。是無他。蓋深自量已知分也。頽齡幾乎耳順、蒙昧与年相称矣。当初所得於師友者。十不記一。好一個棄物。天壤之間、鮮有我顧者。独頂山居兄平日道義不寒。退与此廐院子。素有山田数畦蔬圃二三畝。分甘作個秃頭老農、躬耕手種、聊以卒歲、亦足以自娛。幸勿煩憂懸。但欲得此生之中追隨左右及方山竺峰諸公高躅、詣于嵩山拜祖塔、罷而帰龍峰啜茗話旧、亦未可得

也。徒增悵快耳。似聞、上利嘗罹元弘兵火衆屋一燼、如今所經營者止於仏殿一挙而已。厨下清淡、時或俵米度日之多矣。常人分上必不獲無少勞慮。左右寬量大度、寧復目前世故足介高懷也哉。切希、垂念乃祖之道危如累卵、不倦槌払發揮正宗、無窮法利溥賑迷徒、是則副愚不肖小弟等所以渴望。至祝至禱。問及元泰今夏在此聚首。渠又無日不慕左右道風。怕是秋涼將宗禪、同去執侍座下也不定。姑此略布。極熱、為法保蓄。不宣。

〔訓〕 又た〔実翁和尚に答う〕

越弟来たりて賜る所の手教を出だし示す。香を焚きて繙閱し仍つて審らかにす。此の日道福兼ねて昌え興寢清勝なること、忻慰して已むこと無し。細かに来論を味わうに、区々として愚の林下に掩閑して世に趨るに懶ることを痛責す。又た云く、「風雲の際会、以て峻擢を膺けたまえ」と。夫れ何ぞ期せらるること太だ過ぎたるや。何を以てか敢えて当たらんや。自ら厚く存撫を荷うに非ずんば、則ち安んぞ此に到ることを得んや。銘感の至り勝うること靡し。愚壯歳にして衆に隨うの日、東西班列すら尚お以て敢えて意を措かず、何ぞ況んや大なる者をや。是れ他無し。蓋し自から深く已を量り分を知るゆえなり。頽齡幾乎んと耳順にして、蒙昧の年と相称す。当初師友より得る所は十に一も記さず。好一個の棄物なり。天壤の間、我れを顧みる者有ること鮮なし。独り頂山居兄は平日道義寒からず。退いて此の廢院子を与う。素より山田数畦、蔬圃二三畝有り。分に甘じて個の禿頭の老農と作り、躬耕手種し、聊か以て歳を卒われば、亦た以て自ら娛しむに足れり。幸わくは憂懸を煩わすこと勿かれ。但だ此の生の中左右及び方山・竺峰の諸公の高躋に追隨して、嵩山に詣でて祖塔を拜し、罷わりて龍峰に帰り茗を啜つて旧を話さんことを得んと欲すも、亦た未だ得可からざるなり。徒に悵快を増すのみ。聞くに似たり、上利嘗て元弘の兵火を罹りて衆屋一燼し、如今経営する所の者は止だ仏殿に於いて一挙するのみ。厨下清淡にして、時に或いは米を俵じて日を度ること多しと。常

人の分上は必ずしも少なき勞慮無きことを獲ず。左右の寛量、大度は、寧ろ復た目前の世故高懷に介むに足らんや。切に希わくは、念を乃祖の道の危うくして累卵の如くなるに垂れて、槌・払倦まずして正宗を發揮し、無窮の法利、薄く迷徒を賑わさば、是れ則ち愚不肖の小弟等が渴望する所以に副わん。至祝至禱。問い及びし元泰は今夏此に在りて首を聚む。渠れ又た日として左右の道風を慕わすということ無し。怕らくは是れ秋涼に宗禪を將いて、同に去きて座下に執待せんも也た定まらず。姑く此に略ぼ布く。極めて熱し、法の爲に保蓄せよ。不宣。

○掲載書籍：「大正蔵八一・一二三c・一二四b」「訓註本下・二一八」。○実翁和尚：臨濟宗大覚派の実翁聡秀（？）
 ～一三七二～のこと「補1」。○越弟：使僧を務めた越の下字がある僧侶。○手教：手紙。教示の意を含む丁寧語の書札。○焚香：香をたく。焼香する。○繙閱：書物を開いて読み調べること。○興寝：起居。日常の立ち居振る舞い。○清勝：書簡文で相手が健康で元氣なことをよろこぶ挨拶の言葉。○忻慰：喜びを感じることを。○来論：来てざとすること。○掩関：ある場所が扉を閉ざすことによつて社会から隔絶した状態にあることを指す。門を閉ざして暮らす。隠棲する。○趨世：世務に赴く。世間の雑務に奔走する。官職を帯びて動く官寺や大寺院の職任を担うことも含む。○痛責：きびしく責める。○風雲際会：名君と賢臣が出会うこと。時運にめぐり合うこと。機会を捉えること。○峻擢：特別にぬき用いる。不次の拔擢。昇進する。○見期：期待される。○存撫：撫存。慰問する。なぐさめあんずる。○銘感：深く胸に刻んで感謝する語。○壮歳：働きざかりの年頃。壮年。○隨衆：ある師家のもとで修道しているもの。○東西班列：両班。禅宗寺院で、寺院運営における東班と西班のこと「補2」。○措意：心意をくぼる。○何況：ましてはなおさらのことだ。○頽齡：老衰。衰えていく年齢。○耳順：六十歳のこと。『論語』『為政』第二に「吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而从心所欲、不踰矩」とあるを踏まえる。○蒙昧：愚かで道理に暗いこと。○相称：相応と同意。○好一箇：よい。立派な。○棄物：棄てられて用いられ

れない物。廃物に同じ。○天壤…天と地。世の中に。天下に。○頂山居兄…臨濟宗大覚派の頂山全居（生没年不詳）のこと「補3」。○道義不寒…温情深い。○廃院子…小さな廃院を意味する。寂室が住している寺を謙つたもの。頂山が住持していた備前の大土山慈光寺か。「寂室抄」は、「左伝如云弊村類也。言此院本実翁居処也。然今我退被付与開山。故云退与」と記述。詳細は不明。○山田…山の中・間にある田んぼ。○畦…土地の広さを表す単位。「畝」に同じ。○蔬圃…野菜をつくる畑のこと。菜園。○畝…土地を表す単位で一畝は約三〇坪（九九平米）。○躬耕手種…自ら畑を耕し、種を蒔いて作物を育てること。自給自足。○卒歳…歳がおわる。この場合の年は一年と一生の二つの意味を有すると判断し、訳文では「年（二年／生涯）」と補った。○左右…尊称であり、ここでは実翁和尚を指す。○方山…約翁徳儉の法嗣である方山元矩（生没年不詳）のこと。『仏灯国師語録』の「建長寺録」「南禅寺録」の編者であり、寂室禅師とは兄弟弟子にあたる。○竺峰…不詳。○高躅…高尚な行爲。○嵩山…建長寺の開山塔頭を嵩山西来庵と言う。西来庵の門には今も嵩山の扁額が掲げられている。○祖塔…蘭溪道隆の霊塔。○龍峰…龍峰庵のこと。約翁徳儉の塔頭。現在は龍峰院と言いい建長寺塔頭の一つとして現存する。○茗…上質な茶。良い茶。○悵快…なげくこと。がっかりして心が楽しまないこと。○似聞…風の便りに聞く。噂に聞くの意。○上利…相手の寺院に対する尊称。ここで言う東勝寺は、鎌倉の東勝寺のことを指すと推定される。○衆屋…多くの建物。○一燼…焼きつくされたこと。○経営…家屋などを造る。○厨下…庫厨。庫院。寺院の台所。○清淡…きれいでさっぱりしていること。この場合は庫院がさっぱりして食べ物がないことを、別の綺麗な表現で呼称したものと考えられる。○俵…ばらばらに散らす。わけ与える。「俵米」の意味が取りづらいが、食料がないという事態からすれば、施入されている米を日々使う分を細かくわけて、薄いお粥にして飢えをしいのでないかと推定。○度日…日を過ごす。生活する。○常人分上…普通の人の力量。「分上」は、本来の持ち前、器量、力などの意。○勞慮…憂の義。○寛量…寛大。○大度…大きな度量。○愛復…二字で「寧」の意味。○世故…生計。○高懷…高尚な心。○垂念…配慮する。心配する。○危如累卵…危於累卵。『韓非子』「十過」「故曹小国也、而迫於晋楚之間、其君之危猶累卵也」、『史記』「范雎伝」「秦王之国、危於累卵。得臣則安。然不可以書伝也」などに基づく。積み上げた卵のように不安定で危険なさま。○槌・

払：槌は槌砵で修行生活で用いる鳴らし物。払は払子で住持が説法に用いる。ここでは住持の修行僧への教化・指導を指す。○倦：疲労する。疲れる。○無窮法利：限りない大法の利益。○賑：救済する。○愚不肖：愚か者。自身の卑称。○小弟：自分をへりくだっている語。○至祝至禱：切に祈念いたします。「祝」「禱」は、共に祈る義。○元泰：「寂室抄」に「僧名也」とあるが詳細は不明。○聚首：修行のために参集すること。○秋涼：陰暦八月の異称。○宗禪：「寂室抄」に「僧名也」とあるが詳細は不明。○執侍：師に随待してその諸用に務めること。○座下：貫下と同じ意の敬語。手紙のあて名に書き添えて、相手への敬意を表すことば。○略布：大略を書きつらねること。○保斎：睡眠などを適度にとること。自愛に同義。○不宣：十分に意を述べつくさない意で、手紙の終わりに添える語。不悉。不尽。

〔訳〕又〔実翁和尚に答える〕

実翁和尚から頂戴したご書状を越弟が持参して示してくれました。香を焚いて恭しく拝読し、繰り返し読み内容を確かめました。仏道も幸福もますます栄え、起居清勝たることお慶び申し上げます。よくよくお手紙を味わいましたが、事細かに世を捨て林下に隠居する私のことを厳しくお叱りいただきました。また、「時節が至ったのだ、そのお役を受けられよ」と仰せられました。私への高すぎるご期待に恐縮の限りです。どうして私などがそのようなお役につくことができましようか。いつも暖かくお気をかけていただいたこと、それがなければ、私はどうしてここまでやってくることができましようか。感激の至りでございます。私は若い頃には僧堂の東西の両班に列することさえ考えたことがありませんでした、ましてや大きな責務（である大利の住持）などどうして担えましようか。他に理由はありません。ただ自身の分をよく知っているだけのことです。年老いて六十に近づいているに、まだ愚かで道理に暗く、年齢にふさわしくなつてはおりません。かつて師や法友から学び得たものは十分の一も記憶しておりません。誠に立派な役立たずよ。天地の間

に私を顧みる人はほとんどありません。ただ頂山全居和尚だけは、平素より温情が厚く、自ら退いてこの空き寺を与えて下さいました。この寺にはもとの田んぼが数畦と野菜畑が二三畝（六〇〇九〇坪）あります。この状況に甘んじて坊主頭の老農夫となり、自給自足をして、どうにか年（二年／一生）が終わるのであれば、またそれも楽しい暮らしです。どうか心配なさらないで下さい。ただ、生涯のうちにあなた様や方山和尚や竺峰和尚の素晴らしい行いを見習い、建長寺嵩山西来庵へ行き蘭溪和尚の靈塔を礼拝して、それが終わりましたら龍峰庵に帰って良い茶を飲みながら、共に昔の話を語り合いたいと思っておりますが、まだその機会がありません。ただただ残念な気持ちが増していくばかりです。聞くところによると、貴寺はかつて元弘の兵火にかかつて多くの建物が焼き尽くされ、今は仏殿のみが再建されたということです。庫院（台所）は貧しく、時には「頂いた」米を（より細かく）配けてその日どうにか過ごされることも多いとのこと。普通の人の力量では、まったく憂慮せずに済むというわけにはいかないものです。目前の世の雑事など、貴兄の高懐の妨げとなるはずなどありません。切にお願いすることは、祖師の大道が危うく由々しき事態にあることを配慮していただき、学人接化に飽くことなく、正しい宗旨を発揮して、尽きることはない仏法の利益をもつて、あまねく迷情の衆徒を救済しくださることこそ、私どもが切望することでございます。（その成就を）心より祈念申しあげます。お尋ねの元泰は今年の夏ここで修行をしていました。彼は一日として貴兄の道風を慕わない日はありませんでした。恐らく涼しい秋の季節になりましたら、宗禪と一緒にそちらへ行つて貴兄に随待するでしょうがまだ決まっております。大略を書きました。酷暑の折、どうか法のためにも御身を大切にされますように。不宣。

【茶話】【交誼の茶】実翁聡秀からの書簡に対する返信である本書簡において、寂室は、実翁から大刹住持へ

の就任を請われたものの、これを丁寧な形で辞したとみられる。寂室は、頂山和尚から譲られた小規模な廃院に移り住み、田畑を耕して自給自足の生活を送り、その静かな山林生活こそが自らにふさわしい境地であることを率直に伝えている。そのうえで、生あるあいだに実翁和尚をはじめ、方山和尚・竺峰和尚ら諸友の高風に学び、建長寺西来庵における蘭溪道隆の霊塔を参拝し、その後龍峰庵に帰って、師・約翁徳儉の塔頭において茶を酌み交わしながら旧交を温めたいとの願いも述べている。ここで語られる「茗を啜って旧を話す」茶は、清規に定められた日常修行の茶でもなく、仏祖に供える献茶でもない。むしろ、禅僧どうしの交誼を確かめ合い、共に歩んだ修行の歳月を語り直すための、交際の・生活的な茶である。すなわち、本書簡に見える喫茶は、清規だけでは捉えきれない、中世禅林の生活実践としての「交誼茶」の実態を示す貴重な史料と言える。

〔補注〕

（一） 実翁和尚：臨済宗大覚派の実翁聡秀のこと。葦航道然の法を嗣ぐ。入元して古林清茂に参じた。帰国後は下野の長福寺の開山となる。鎌倉の東勝寺、淨妙寺に住し、建長寺の第三十五世となった。詳細は不明ながら、多くの著名な禅僧の語録や漢詩集にその名が登場する。

（二） 両班：東班と西班のこと。両序（東序・西序）ともいう。中世の禅宗寺院の制度では、寺院の経営面を司る知事が東班、修行面を司る頭首が西班といわれた。東班は都寺・監寺・副寺・維那・典座・直歳の六知事。西班は首座・書記・藏主・知客・知殿・知浴の六頭首。本来は協力して叢林を運営していくべき立場であるが、東班は経済力を持つて寺院の実権を握り、西班は住持に出世できるという性格から、しだいに両班の隔絶や対立が生じることもあった。

（三） 頂山居兄：臨済宗大覚派の頂山全居のこと。備前（岡山県）の慈光山と西祖寺を開く（現在はともに廃寺）。

西祖寺で六十歳で示寂し、遺言で寂室元光にその後席を託している。『寂室録』卷上「仏祖贊」「頂山和尚」、卷下「小仏事」「頂山和尚拈香」、卷下「小仏事」「西祖頂山和尚」、卷下「小仏事」「頂山和尚入塔」がある。「頂山和尚入塔」には「滅却通玄正伝、掃蕩瑞龍活計」とあり、通玄が桑田道海の塔頭、瑞龍が靈巖道昭の塔頭であるから、大覚派の僧侶とみられる。寂室元光の法友であり理解者の一人。

〔寂室9〕『永源寂室和尚語』下「書簡」

又〔答実翁和尚〕

上覆。茲者区区奉屈無他、祇欲共啜苦茗・食淡飯、而少慰遠別之懷耳。想亦人事繁冗、打疊行李未弁。今既不敢勉強到請矣。前見許進発日、蒙賜面違、感戴至意。然迂回両里路也、是許多担閣、切勿下訪、為幸。乃米麴等零碎物子、件件少許上納、愧作可量。要兄候調、參随一挙、与他商量也好。昨以数紙、干瀆神用、得罪罪。余付要兄道達、不備。

〔訓〕又〔答実翁和尚〕

上覆。茲者区区に屈を奉ずるは他無し、祇だ苦茗を共に啜り淡飯を食して、遠別の懷を少しく慰めんと欲するのみ。想うに亦た人事繁冗にして、行李を打ち畳むこと未だ弁ぜず。今既に敢えて勉強して到り請うことをせず。前に進発を許すを見るの日、面違を賜うことを蒙り、至意感戴す。然れども迂回すること両里の路なり。是れ許多の担閣、切に下訪すること勿れ、幸いと為す。乃ち米麴等の零碎の物子、件件少し許り上納す。愧じて量る可し。兄と候調して參随の一挙せんことを要す。他と商量するも好し。昨日数紙を以て、神用を干瀆す。得罪、得罪。余は兄に付して道達せんことを要す。不備。

○掲載書籍…「大正蔵八一・一二四b」〔訓註本下・二三二〕。○実翁和尚…臨済宗大覚派の実翁聡秀（？）一三七（一）のこと「既出」。○上覆…返信書簡の冒頭定型句。○茲者…このたび。ここに。○区区奉屈…「区区」はつまらない、ささやかな意。「奉屈」は相手を煩わせる、負担をかける意。○祇欲…耳…ただうしただけである。○苦茗…苦い銘茶。○淡飯…粗末な食事。○繁冗…わづらわしい。○行李…荷物。○不敢…あえてくせず。どうしてもしない。○面違…直接会うことができなかったこと。○両里路…二里。室町時代の一里は、五町（約五四五m）から六町（約六五五m）とされる。○担閣…旅程を滞らせる。足止めとなる。書簡文では、訪問による相手側の行程遅延を懸念する場面で用いられる。○下訪…訪ねて来ること。○麴…小麦粉。小麦粉製品を指す場合もあるが、ここでは小麦粉の意。○零碎…こまごまとした。○件件…あれやこれや。○上納…贈呈。○候謁…謁見。訪問し拝謁すること。○参随…同行。随行。○商量…議論する。相談する。○干瀆…みだりに煩わす。みだりに侵す。○得罪…感情を害すること。○道達…導く。○不備…不充分。添え状の結びの常套句。

〔訳〕 拝復。

お返事申しあげます。このたび、ささやかな無理をお願い申し上げたのは他の理由からではありません。ただ、兄とともに苦く良いお茶をすすり、淡い食事をともにして、遠く離れてしまったさびしさを、少しでも慰めたいと願っただけのことなのです。きつとあなたもまた人の世の務めに追われ、まだ荷物の支度も整っていないことでしょう。今こちらから強いてそちらに行ってお招きするようなことは決していません。先日、出立の日程をお知らせいただきながら、直接お目にかかれませんでした、お心遣いを賜りましたこと感謝申しあげます。しかしながら、「お越しいただくには」二里もの遠回りです。大分遅れてしまいますから、お越しくださることはなさらぬようお願い申し上げます。さて、米や麵（小麦粉）などこまごまとした物、どれも少しづつではありますがお届けいたしました。まことに恥ずかしい限りです。兄にお目にかか

り一緒に行動したいと願っております。ほかの方ともご相談ください。昨日はたびたび書状を送り、あなたの大切な務めを煩わせてしまいました。誠に申し訳なくご容赦願います。そのほかのことは兄よりお導きください。粗略ながらお返事いたします。

【苦茗】【交誼の茶】本書簡は、実翁聡秀からの書簡に対する寂室元光の返信であり、両者の親密な関係を背景として、「苦茗を共に啜り、淡飯を食す」という素朴な願いが率直に述べられている。ここに見える「苦茗・淡飯」は、特定の儀礼や式法を指す語ではなく、僧の日常生活における質素な飲食を象徴する表現として用いられていると考えられる。寂室が望んだのは、同道の友として日常の茶食を共にすることであり、この記述は南北朝期の禅院生活における喫茶の位置づけをうかがわせる史料といえる。すなわち、本史料に見える喫茶は、清規などに規定された儀礼的な「茶礼」を指すものではなく、僧の日常的な修行生活のなかで行われていた喫茶を反映するものである。禅院において喫茶が制度的な儀礼としてのみ存在していたわけではなく、日常修行の一部としてのみ存在していたわけでもなく、同道の僧との交際としても実践されていたことを示す具体的な事例といえる。

「寂室10」『永源寂室和尚語』下「書簡」

寄無夢和尚

某甲拝覆雄峰前前板座元禅师。違奉既是幾乎三十有余年、然無一日不在瞻望風采之中。忽辱過訪。忻慰之至、豈可勝言哉。第恨象駕登途太疾、不獲陪從清談究尽款曲耳。聆羊皮一片、龜茶二袋、聊表微忱者。幸勿罪瀆。伏希慈亮。為道自重。不備。

【訓】無夢和尚に寄す。

某甲、雄峰の前前板座元禪師に拝覆す。違奉して既に是れ幾と三十有余年なり。然れども一日として風采を瞻望するの中に在らざること無し。忽ち過訪を辱なくす。忻慰の至り、豈に勝げて言う可けんや。第だ恨むらくは、象駕登途太だ疾くして、清談に陪従して歎曲を究め尽くすことを獲ざるのみ。羚羊皮一片、鹿茶二袋、聊さか微忱を表す者なり。幸わくは浼瀆を罪すること勿かれ。伏して希わくは慈亮。道の為めに自重せよ。不備。

○掲載書籍：「大正蔵八一・一二四c～一二五a」「訓註本下・二四六」。○無夢和尚：臨濟宗聖一派の無夢一清（一二九四～一三六八）のこと。「補1」。○拝覆：頭語。『禅林象器箋』第二十類言語門「拝覆」に「忠曰、覆申覆也。俗訛為反覆酬答之義非也」とある。○雄峰：ここでは百丈山のこと、別名で大雄峰という「補2」。○前板座元：前堂首座のこと。首座は、僧侶のなかでも手本や模範となる僧のことをいう。「前堂首座」とは、前堂の雲水を指導する首座のこと、後堂首座に対して言う。「前前板座元」とあるのは、前の前板座元（前堂首座）という意味。無夢一清は、在元中に百丈山の東陽德輝のもとにあつて、前板座元を勤めていたのであろう。○違奉：「違」は離れること。「奉」は敬意を示す副詞。○風采：立ち居振る舞いや人柄。風格。○瞻望：遠くを仰ぎ見ること。敬意をもつて心の中で慕い仰ぎ見ること。○過訪：訪問すること。○忻慰：うれしく思い慰められること。○象駕：立派な車。人に対する敬称としても使われる。○登途：登程。旅に出発すること、旅立ち。○清談：世俗を離れた優美な話。高尚な話。○陪従：つき従うこと。お供すること。ここでは、同席するという意。○歎曲：うちとけて人と交わる。親密な交わり。真心のこもった会話。○羚羊皮：かもしかの毛皮。贈り物に用いられた高級素材。○鹿茶：粗末な茶。質素な茶の意。○微忱：わずかな忱（まこと）。わずかばかりの誠意。○浼瀆：汚すこと。謙遜の言葉として用いられる。○慈亮：慈しみの眼で見る。手紙の中で相手の了解を望む意として常用される。○自重：自身の健康・身を大切

にすること。○不備…拝覆（頭語）に対する結語。

〔訳〕無夢和尚への便り。

大雄峰（百丈山）の前前板座元禪師であられた無夢一清和尚さまにお便り申し上げます。お別れしてからすでに三十有余年が経ちました。しかしながら、一日としてあなた様の徳を慕わない日ありませんでした。帰朝されて間もなく、すぐに来訪をいただきましたことは大変恐れ多いことです。この上なく喜ばしく、とても言葉では言い尽くすことができません。ただ残念なことは、出立があまりにも早く、清談の場に同席してのうちにけた会話をするまでの時間がなかったことです。羚羊皮れいようひの一片と、鹿茶そさを二袋、わずかばかりの真心としてお届け致します。私の失礼をどうかお許しください。何卒、慈悲の心で私の気持ちを察し下さい。仏道のためご自愛下さい。粗略ながらお返事いたします。

【贈答品としての茶】寂室元光が、無夢一清に「羚羊皮一片、鹿茶二袋」を送っている。この場合の鹿茶は謙辞と考えられる。寂室は寺内で茶を栽培し、茶を摘んでおり、この茶摘みという作務を寂室は極めて重視していた。したがって、ここで言う「鹿茶」は自身の住持する寺で採れた茶を送ったものと考えられ、自分で摘んだ茶ではないかと推定される。自らが摘んだ茶であればこそ「鹿茶」という謙辞を用いた可能性が高い。禅僧が手摘みの茶を送る例とすれば、鏡堂覚円が建仁寺から、鎌倉の北条貞時に親収（手摘み）の「新茶」を送っている（『鏡堂和尚語録』巻二「偈頌」、『鎌倉禅茶15―17』）。表現上は「鹿茶二袋」であるが、「羚羊皮一片」と共に送っていることから、それに見合う上質の茶を送っていると判断され、茶に貴重な贈り物としての位置づけが見られることになる。寂室元光が茶をどのように考えていたのかを考える上で、きわめて重要な史料である。

〔補注〕

（１） 無夢和尚：臨濟宗聖一派の無夢一清のこと。玉溪慧椿に参じた後、嘉元（一二三〇三〜一二三〇六）の初め入元し、三十年と長期間の滞在する。廬山の龍巖徳真、雪峰山の樵隱悟逸、百丈山の東陽徳輝に参ずる。観応元年（一二三五〇）三月に帰朝し、延文四年（一二六一）に東福寺の第三十世となる。その後は、中央と距離をおき、師である玉溪慧椿ゆかりの備国（岡山県）井山宝福寺の住持となった。

（２） 雄峰：百丈山のこと。江西省奉新県の西方に位置する。西北の最も高所を大雄峰という。山中に唐代の馬祖道一の法嗣である百丈懷海によつて開創された大雄山大智寿聖禪寺がある。百丈懷海によつて、この地で行われた禅僧の修行生活は、後に清規という形でまとめられた。この地で後にまとめられた清規を『百丈清規』というが、これは早くに失われたらしい。その後、元統三年（一二三五）に恵宗の勅命により東陽徳輝が『勅修百丈清規』の編纂を行っている。

〔寂室11〕『永源寂室和尚語』下「法語」

示応山善庵主

昔出家学道之流、才入衆来、三蔑縛腰、執爨負舂、不憚劳苦。殆臨危亡之不顧、蓋為法忘軀耳。所以盧郎踏碓乎黄梅糟廠、演祖主磨於白雲山中、百丈為説大義頂去開田、木平每見新到令其搬土。或者折薪論柴枯。或者摘茶辦体用。或者斟井上肩折担悟道。或者束桶失手墮地了禪。皆是外若尽日順做務而奔波。内不須臾参玄之正念。故往往一機一境、壑著磕著。方知此事不必在竹椅蒲团面壁静默之中。吾応山善公、自入空門以来、未嘗一雲偷安逸体。初開松泉、今抛明光。鑿山夷址、穿崖引泉、栽松種竹、縛籬鋤圃、咸将躬為、不敢欲役人。酷有古徳之風度。遐邇靡不嘆服。老拙与公傾蓋之日雖不久矣、其義情濃厚無由為喻。一日出紙求字。写

之以酬其請云。

【訓】 応山善庵主に示す。

昔出家学道の流、才かに衆に入り来たり、三蔑もて腰を縛り、執爨負舂、勞苦を憚らず。殆んど危亡に臨んでも顧みざること、蓋し法の為に軀を忘るるのみ。所以に盧郎は碓を黄梅の槽廠に踏み、演祖は磨を白雲山中に主り、百丈は大義を説かんが為に頂きに去りて田を開らき、木平は新到を見る毎に其をして土を搬ばしむ。或は薪を折りて柴枯を論じ、或いは茶を摘みて体用を辨じ、或は井を斟んで肩に上げ担を折りて道を悟り、或いは桶を束ね失手にて地に墮として禅を了ず。皆な是れ外に尽日作務に順じて奔波するが若きも内には須臾も参玄の正念を忘れず。故に往往に一機一境、壑著礪著す。方に知る、此事は必ずしも竹椅蒲団、面壁静黙の中に在ざること。吾が応山の善公、空門に入りてより以来、未だ嘗つて一霎も偷安逸体せず。初め松泉を開き、今明光に抛る。山を鑿り址を夷らげ、崖を穿ち泉を引き、松を栽え竹を種え、籬を縛り圃を鋤くに、咸く躬を將て為し、敢えて人を役せんことを欲す。酷だ古徳の風度有り。遐邇嘆服せざること靡し。老拙公と蓋を傾むくること日久しからずと雖も、其の義情の濃厚なることを喩えと為すに由無し。一日紙を出し字を求む。之を写して以て其の請に酬ゆと云う。

○掲載書籍：「大正蔵八一・一二九b～c」【訓註本下・三四八】。○応山善庵主：不詳。○才入衆来：纔入衆来。始めて僧侶の仲間入りをする。○三蔑縛腰：三本の竹縄を帯代わりにして腰を縛る「補1」。○執爨負舂：炊事や米つきの典座作務。「爨」はかしぐ、飯を炊く。「舂」はうすづく、臼で栗などをつく「補2」。○殆臨危亡之不顧：あやうく身の危険に臨むようなことになつても氣にかけない。○為法忘軀：仏法のために我が身を顧みないこと「補3」。○盧郎踏碓乎黄梅槽廠：「六祖碓房」の故事「補4」。○盧郎：禅宗六祖の曹溪慧能（六三八～七一三）のこと

〔補5〕。○黄梅：黄梅山のこと〔補6〕。○演祖主磨於白雲山中：「五祖磨事」の故事〔補7〕。○演祖：臨濟宗楊岐派の五祖法演（？～一一〇四）のこと〔補8〕。○白雲山：安徽省安慶市の白雲山のこと〔補9〕。○百丈為説大義頂去開田：「百丈開田」の故事〔補10〕。○百丈：唐代、南嶽下の百丈惟政（生没年不詳）のこと〔補11〕。○大義：仏法の大きな道理。○木平見新到令其搬土：「木平搬土」の故事〔補12〕。○木平：唐代、青原下の木平善道（生没年不詳）のこと〔補13〕。○新到：新参の僧。○折薪論柴枯：〔補14〕。○摘茶并体用：〔補15〕。○体用：物事の本体とその作用。○斟井上肩折担悟道：〔補16〕。○束桶失手墮地了禅：〔補17〕。○壑：塞。ふさぐ。○此事：此の事。仏法の一大事。○竹椅：竹製の坐禅椅子。○蒲团：坐禅用の敷物。○面壁静黙：壁に向かつて静かに坐禅すること。この時代は曹洞宗、臨濟宗の相異なく、壁に向かう面壁坐禅であつた〔補18〕。○空門：空の思想を一貫して説くことから、仏教・仏門のことを指している。○一霎：ひとしきり。しばらくの間。○偷安：一時の安息を貪ること。怠けること。さぼること。○逸体：身を安ずる。逸身に同じ。○松泉：備中の曹源寺にあつた松泉庵を指すか〔補19〕。○明光：不詳。○鑿山夷址：鑿山は山を切り開いて道や河を通すこと。夷址で跡地で平らにしたことを指す。松泉庵を開山する際に、山を切り開き、跡地を平らにしたことを指す。○栽松種竹：作務などの労作の修行。その代表的なものとして松や竹が植えられることが取り上げられている〔補20〕。○栽松：『臨濟録』『臨濟栽松』の故事を踏まえる〔補21〕。○籬：かき。まがき。竹や木の枝を粗く編んだかきねのこと。○圃：はたけのこと。○古徳：古の徳の高い人。昔の有徳の人。昔の高徳の僧。○風度：なりふりやおもむきを表す言葉で、すぐれた様子や気高い人格のことを指す。○遐邇：遠近に同じ。遠い所と近い所。またその人々。○嘆服：歎服に同じ。感服すること。感心して心から従うこと。○傾蓋之日：知り合つてからの日数〔補22〕。○義情：「義」は真理。「情」は誠実さや他人への思いやり。

〔訳〕 応山善庵主に示す。

昔出家学道の僧侶は、初めて大衆の中に入ったばかりの頃から、三本の竹縄で腰を縛り、炊事や白づきをし

て、その苦勞をいとわなかった。身を危険にさらすことになっても顧みることなく修行していたが、まさに仏法の為にその生命を忘れて修行していたからである。だから廬行者（慧能）は黃梅山の米つき小屋で碓を踏み、法演は白雲山で磨事をつかさどり、百丈は仏法の大義を説く前に先に「僧と共に」田を開きに行き、本平は新到を見るごとに土を運ばせたのである。ある時は薪を割りながら榮枯盛衰（の道理）を語り、ある時は茶を摘みながら体用を論じ、ある時は井戸から水を汲んで肩に上げ、担ぎ棒を折って仏道を悟り、ある時は桶を束ねる最中に手が滑って地面に落としたところで会得した。それらすべてが外からは一日中作務に追われているように見えるが、内には少しばかりも玄妙な道理を探るという正しい思いを忘れたことはなかった。それゆえ、しばしば一つの機縁や一つの境地において、塞つたりぶつかったりして悟るのである。

必ず知らなければならないのは、此の事（仏法の一大事）は必ずしも竹椅や蒲団にて、面壁しながら静かに坐禅していることの中のみにあるのではない、ということである。応山善庵主は、仏門（禪門）に入つて以来、これまで一度もわずかな時間でさえ怠けたり身体を休めたことがない。まず松泉を開山し、今は明光を拠点としている。山を切り開いて地面をならし、崖を削って泉から水を引き、松や竹を植え、まがきを編んで、畑を耕したが、それらすべて自分自身で行い、敢えて他者の手を借りなかった。真に古徳の風格があり、誰もがみな感服したのである。私は善庵主と知り合つて親交を始めてから間もないが、その奥深い真理とその思いは他にたとえようがない。ある日、「善庵主が」紙を出して文字を求められた。それに応じてこの文を書いてその思いに報いた。

【摘茶】ここでは、茶を摘むことの古則が引用されているのみなので、直接的な喫茶史料とは言えない。しかしながら、寂室は摘茶を含む種々の作務を列記した上で、「此事は必ずしも竹椅蒲団、面壁静黙の中に在

ざることを」と述べているのである。すなわち、寂室元光は作務を坐禅と同様に、禅の此事（一大事因縁）を会得する修行の一つだと理解しており、その代表的な作務の一つとして摘茶を取り上げているのである。茶を摘むことは、寂室元光にとつて、極めて重要であつたことは、他の史料からも窺うことができる。茶を摘むことがまさに此事を明らかにするための大切な修行の一つとして位置づけられることが明記される、極めて貴重な史料と言える。

【補注】

（1）三蔑縛腰…『五灯会元』卷五の葉山惟儼章に「一日、祖問、子近日見処作麼生。師曰、皮膚脱落尽、唯有「一真実」。祖曰、子之所得、可謂協於心体、布於四肢。既然如是將三条蔑束取肚皮、随处住山去。師曰、某甲又是何人、敢言住山。祖曰、不然。未有常行而不住。未有常住而不行。欲益無所益、欲為無所為。宜作舟航。無久住此。師乃辭祖返石頭」（統蔵一三八・八二b）とある。これを踏まえた、『天目明本禅師雜錄』「松花慶歌」「半生幻住西天目、每愛好山如骨肉。破鎚無米不下床、瘦腰三蔑從教」（統蔵一二二・三七五b）なども踏まえているのかもしれない。

（2）執爨負春…炊事や米つきの典座作務。『禅林宝訓』卷一「浮山遠和尚曰、古人親師折友、曉夕不敢自怠。至於執爨・負春・陸沈賤役、未嘗憚勞。予在葉泉、備嘗試之。然一有顧利害較得失之心、則依違・姑息靡所不至。且身既不正、又安能學道乎」（大正蔵四八・一〇一八a）、『天目中峰広録』卷十一「山房夜話中」「及達磨東邁、百丈未生、牛頭横出一枝、南北宗分兩派。皆腰鎌荷鍤、火種・刀耕執爨負春、鵝衣丐食、鉄石身心、冰霜懷抱、以仏祖大事因縁一肩負荷、了無畏怯、蓋行処既親、所到必的矣」（大蔵経補編二五・八〇一a）。

（3）為法忘軀…『六祖壇経』「行由第一」「次日、祖潛至碓坊、見能腰石舂米、語曰、求道之人、為法忘軀、当如是乎。乃問曰、米熟也未。惠能曰、米熟久矣。猶欠篩在。祖以杖擊碓三下而去。惠能即會祖意、三鼓

入室」(大正蔵四八・三四九a)。

- (4) 盧郎踏碓乎黃梅槽廠…「六祖碓房」の故事。『五灯会元』卷一の五祖弘忍章に「咸亨中有二居士。姓盧名慧能。自新州來參謁。祖問曰、汝自何來。盧曰、嶺南。祖曰、欲須何事。盧曰、唯求作仏。祖曰、嶺南人無仏性。若為得仏。盧曰、人即有南北、仏性豈然。祖知是異人。乃訶曰、著槽廠去。盧礼足而退、便入碓房、服勞於杵臼之間、昼夜不息」(統蔵一三八・一八c)とある。

- (5) 盧郎…禪宗六祖の曹溪慧能のこと。范陽(河北省)の盧氏。新州(広東省)に生まる。五祖弘忍の法を嗣ぐ。韶州(広東省)曲江県の曹溪山宝林寺(後の南華寺)で禪風を発揮した。大鑑慧能、六祖慧能ともいう。著作に『金剛經解義』がある。門下には青原行思、南嶽懷讓、荷沢神会などがあり、後世にいたつて発生した五家七宗の禪はすべて慧能の法系から展開した。

- (6) 黃梅…蘄州(湖北省)黃梅県西四〇里にあり、梅が多いのでこの名がある。この黃梅の地は、四祖道信や、五祖弘忍の東山法門の本拠地であり、黃梅の西南城外に五祖弘忍が活躍した東禪寺がある。ここで言う黃梅は、五祖弘忍の活躍し、六祖慧能が受法した東禪寺のことを指す。

- (7) 演祖主磨於白雲山中…「五祖磨事」の故事。『五灯会元』卷十九の五祖法演章に「師澹然礼辞。至白雲、遂攀僧問、南泉摩尼珠話、請問。雲叱之。師領悟。獻投機偈曰、山前一片閑田地。叉手叮嚀問祖翁。幾度壳來還自買、為憐松竹引清風。雲特印可、令掌磨事」(統蔵一三八・三六五b)とある。

- (8) 演祖…臨濟宗楊岐派の五祖法演のこと。綿州(四川省)の鄧氏。白雲守端の法を嗣ぐ。蘄州(湖北省)の五祖山(東山)において、楊岐派の宗風を挙揚した。弟子に圓悟克勤・仏鑑慧勲・仏眼清遠の三仏がいる。『法演禪師語録』三卷がある。

- (9) 白雲山…舒州(安徽省)安慶府桐城県の東二〇里にあり、山中には白雲巖山海会禪寺がある。白雲守端が住したことで知られる。

- (10) 百丈為説大義頂去開田…「百丈開田」の故事。『景德伝灯録』卷九の百丈惟政章に「一日謂僧曰、汝与我開

田了、我為汝說大義。僧開田了帰、請師說大義。師乃展開両手」（大正蔵五一・三五八c）。

- (11) 百丈：南嶽下の百丈惟政のこと。百丈懷海の法を嗣ぐ。一説に馬祖道一の法嗣とも。涅槃和尚。洪州（江西省）奉新県の百丈山二世。細かな行実是不明。

- (12) 木平見新到令其搬土：「木平搬土」の故事。『景德伝灯録』卷二十の木平善道章に「師凡有新到僧、未許参礼、先令運土三担。而示偈曰、南山路仄東山低。新到莫辞三転泥。嗟汝在途経日久、明明不曉却成迷」（大正蔵五一・三七〇a）。

- (13) 木平：青原下の木平善道のこと。袁州の盤龍可文の法を嗣ぐ。真寂禪師と諡する。詳しい行実是不明。『景德伝灯録』二十、『聯灯会要』二十五、『五灯会元』卷六の木平善道章には、木平が金陵の李氏に招かれて、問答をしたことが記されている。

- (14) 折薪論柴枯：『五灯会元』卷五の葉山惟儼章に、「道吾、雲巖侍立次、師指按山上枯柴二樹、問道吾曰、枯者是、榮者是。吾曰、榮者是。師曰、灼然一切処、光明燦爛去。又問雲巖、枯者是、榮者是、巖曰、枯者是。師曰、灼然一切処、放教枯淡去。高沙弥忽至。師曰、枯者是、榮者是。弥曰、枯者從他枯。榮者從他榮。師顧道吾、雲巖曰、不是、不是」（続蔵一三八・八二c）とある柴枯を語つたものを踏まえる。ここには、折薪という話は見えないが、『五灯会元』卷十八の仏心本才章に「窃觀隣案僧說曹洞広録、至葉山採薪帰、有僧問、甚麼処来。山曰、討柴来。僧指腰下刀曰、鳴剝剝、是箇甚麼。山拔刀作斫勢。師忽欣然、擲隣案僧一掌。揭簾趨出、衝口說偈曰、徹、徹。大海乾枯、虚空迸裂。四方八面絶遮欄、万象森羅齊漏泄」（続蔵一三八・三四八b）とあり、『曹洞広録』に記されていた葉山が採薪した際の問答などの情報が合わさつたものか。

- (15) 摘茶并体用：既出「寂室3」。

- (16) 斟井上肩折担悟道：『五灯会元』卷十六の天衣義懷章に「礼明、明覺於翠峰。明問、汝名甚麼。曰、義懷。明曰、何不名懷義。曰、當時致得。明曰、誰為汝立名。曰、受戒来十年矣。明曰、汝行脚費却多少草鞋。曰、和尚莫瞞人好。明曰、我也没量罪過。汝也没量罪過。你作麼生。師無語。明打曰、脱空謾語漢出去。入室次

覺曰、恁麼也不_レ得。不_レ恁麼、也不_レ得。恁麼不_レ恁麼、總不_レ得。師擬議。覺又打出。如是者數四。尋為_二水頭_一。因汲_レ水折_レ担忽悟。作_二投機偈_一曰、一二三四五六七。万仞峰頭独足立。驪龍領下奪_二明珠_一。一言勸_二破維摩詰_一。(統藏一三八・三〇二a)。

(17) 束桶失手墮地了禪：『五灯会元』卷十四の真歇清了章に「師一日入_レ厨看_レ煮_レ麵次、忽桶底脫。衆皆失_レ声。曰、可_レ借_レ許。師曰、桶底脫自合_レ歡喜。因_レ甚麼却煩惱。僧曰、和尚即得。師曰、灼然。可_レ借_レ許一桶麵。」(統藏一三八・二七〇b)、『禪林僧宝伝』卷二十二の雲峰文悅章に、「地坐_レ後架。架下束破桶盆自_レ架而墮。忽開悟。頓見_レ芝從前用處。走搭_レ伽梨。」(統藏一三七・二六五a)。

(18) 面壁靜默：中世日本から江戸時代にかけての面壁坐禪については、館隆志「鎌倉期の禪林における面壁坐禪」『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第十二号、二〇一一年。同「江戸期の禪林における面壁坐禪」『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第十四号、二〇一三年。同「文献にみる坐禪の変遷」『禅文化研究所編』『新坐禪のすすめ』禅文化研究所、二〇二一年を参照されたい。

(19) 松泉：「寂室抄」に「松泉。疑是備中ツ、山松泉庵歟。今現曹源寺末庵明光、在_二備中国_一未_二分明_一。云_二明光寺_一歟」とある。また、松泉庵について『瑞石歴代雜記』巻一の至徳元年(一三八四)条に「松嶺、備中に在_二りし時_一、英(靈仲禪英)を招いて松泉庵に居しめて往来道話す」とある。「松嶺」は寂室の法嗣に松嶺道秀(一三三〇～一四一七)、靈仲禪英(一三三〇～一四一〇)はそれぞれ寂室元光の法嗣。

(20) 栽松種竹：『天聖広灯録』巻十五の穴山延昭章に「問、如何是鑊頭辺事。師云、山前一片閑田地、種_二竹栽松_一一境寛」とあり、「鑊頭辺事」すなわち作務などの労作の修行として、「種竹栽松」が上げられている。禪寺で松や竹を植えることは作務の代表的なこととして知られていたと考えられる。ただし、『仏光国師語録』巻三「建長寺語録」「上堂。福山無_二本抛_一。一味説脱_レ空。有時暗中抛_レ号、有時換_レ手点_レ胸。朝看_二南北_一、暮看_二西東_一。乘_レ風不_レ如_レ歩_レ月。種_二竹不_レ如_レ栽_レ松_一」(大正蔵八〇・一五〇c)とあるように、禪寺では松を栽培することの方が重視されていたようである。これは、「臨済栽松」の故事に依ると推定される。

(21) 栽松：『臨濟錄』「師栽松次、黄檗問、深山裏栽許多作什麼。師云、一与山門作境致、二与後人作

標榜。道了、将鏝頭打地三下。黄檗云、雖然如是、子已喫吾三十棒了也。師又以鏝頭打地三下、作嘘嘘声。黄檗云、吾宗到汝、大興於世」。

(22) 傾蓋之日：知り合つてからの日数。「傾蓋」は車蓋（車を覆うかさのようなもの）を接し合つて語り合うこと。

『孔子家語』に「孔子之郷。遭程子於塗。傾蓋而語。終日甚相親」とある。

〔寂室12〕『永源寂室和尚語』下「法語」

示園林方長老

言前領旨、句外明宗。独立乾坤、眼空宇宙。若約衲僧門下、則喚來教他洗脚始得。這般現成說話、正是家常茶飯。宜且高閣。真個要欲截斷生死根株、拶到仏祖田地、當須退步、就已頻下鈍工、參取趙州無字。是則把本修行也。園林圭岩長老、雖既住院匡徒、以大事因縁為念、獲見問及。厥志可嘉。仍迅筆以贈云。

〔訓〕園林の方長老に示す。

言前に旨を領じ、句外に宗を明らかにす。独り乾坤に立ち、眼宇宙を空す。若し衲僧門下に約せば、則ち喚び来たりて、他をして脚を洗わせしめて始めて得ん。這般の現成の說話、正に是れ家常茶飯なり。宜且しく高閣すべし。真個に生死の根株を截斷し仏祖の田地を拶到せんことを要欲せば、當に須らく歩を退き、己に就いて頻りに鈍工に下り、趙州無字を參取すべし。是れ則ち本を把りて修行するなり。園林圭岩長老、既に院に住して徒を匡すと雖も、大事因縁を以て念と為し、獲見し問及す。厥の志を嘉す可し。仍ち迅筆に以て贈りて云う。

○掲載書籍：「大正蔵八一・一三二c」【訓註本下・三九〇】。○園林方長老：臨濟宗大覚派の圭巖方（生没年不詳）のこと。詳細は不明「補1」。○宗旨：宗の要旨。宗門の奥義。○乾坤：天と地。○宇宙：ひさしとはり。空間と時間。天地世界。○洗脚：坐禅前に足を洗うこと「補2」。○現成：ありのままに現れること。○家常茶飯：尋常茶飯。日常の飯を食べ茶を飲むこと「補3」。○高閣：こうかく。高いところに放置する。○仏祖田地：菩薩の境地。祖師の境地。○就已：自己をかえりみる。○己頻下鈍工：「補4」。○鈍工：時間をかけてコツコツした努力。地道な努力。○趙州無字：「趙州無字」の公案「補5」。○大事：一大事。一大事因縁。もつとも重大な因縁。一大事のための因縁。仏法の一大事。○獲見：お会いする機会をえること。○問及：尋ねてそのことに話が及ぶこと。

【訳】園林の方長老に示す。

言葉に出る前にその旨を領解し、言葉の句を超えて宗旨を明らかにする。天地に独り立ち、その眼で宇宙に一切空を見る。もしこれを衲僧の門下にあてはめれば、呼び寄せて脚を洗い「そこで祖師西来意を問うてこそ」ようやく得られるのだ。このような現成の説話は、まさに日常茶飯の類である。しばらく棚上げしよう。まことに生死の根本を截ち切り、仏祖の境地に逼り至ろうと望むならば、まさに一步を退いて、己自身がたびたび愚鈍な修行僧となり、「趙州の無字」の公案に参禅すべきである。これこそ、本質をとらえて修行するということである。園林圭岩長老は、すでに住院して修行僧を指導する立場になっているが、一大事の因縁を心に思い、直接面会して質問されたのだ。その志は大変素晴らしいと思う。そこで速筆をもつてこれを贈る。

【家常茶飯】直接的な喫茶史料ではない。ただし、ある説法を「家常茶飯」と評しているが、これは禅院においては実際に日常の喫茶が一般化していたからこそ説得力を持つ言葉である。鎌倉時代、南北朝時代にお

いて禅林では日常的に茶が飲まれていたのである。

〔補注〕

（１）園林方長老：臨濟宗大覚派の圭巖方（生没年不詳）のこと。詳細は不明ながら、『永源寂室和尚語』上「偈頌」「寄圭巖方書記（時住円林寺）」「吾兄帰隠旧園林、衰朽猶居雲壑深。又是天寒歲云暮、擁爐聽雪憶知心」（大正藏八一・一〇五a）があり、「吾兄」という表現からは、寂室元光の兄弟子と推定される。おそらく、約翁徳儉のもとで同門であつたのであろう。また、永源寺で書記を務めている際に、園林寺の住持となつたようである。

（２）洗脚：足を洗う。行脚僧が一寺に掛搭する際に、よこれた足を洗うこと。『臨濟録』「趙州行脚時參師、遇師洗脚次、州便問、如何是祖師西來意。師云、恰值老僧洗脚、州近前作聽勢。師云、更要第二杓惡水潑在。州便下去」（大正藏四七・五〇四a）、『古尊宿語錄』卷十四「趙州真際禪師語錄之余」「師因到臨濟。方始洗脚。臨濟便問、如何是祖師西來意。師云、正值洗脚。臨濟乃近前側聆。師云、若會便會。若不會。更莫唱啄作麼。臨濟抃袖去」（統藏一一八・一六五d）とある。趙州と臨濟の問答は、史料によつて問答の主導者が異なる足を洗うことは、平常（家常）に仏法があることを示しているのであろう。また、足を洗つたことを見せたのちに「祖師西來意」を問うことが始まっている。

（３）家常茶飯：日常の飯を食べ茶を飲むこと。『古尊宿語錄』卷四十「雲峰悅禪師後住雲峰語錄」に「上堂、僧房閑寂夏修持、閉戸疎人怪亦知。儂家自有同風事、千里無來却肯伊。且作麼生是同風事。還會麼。餲餅蒸作、家常茶飯。一言半句、古人葛藤。雲峰与、你向無交涉。下座」（統藏一一八・三四三a）とあり、『嘉泰普灯録』卷三の芙蓉道楷章に「乃問、仏祖言句、如家常茶飯。離此之外、別有為人言句也無。曰、汝道、寶中天子敕、還飯堯舜禹湯也無。師欲進語。青以仏子撼師口曰、汝発意來、早有三十棒也。師即開悟。再拜便行。青曰、且來、闍梨。師不顧。青曰、汝到不疑之地耶。師以手掩耳」（統藏一三七・四一a～b）とある。

(4) 己頻下鈍工…『大覺禪師語錄』卷下に収録された、蘭溪道隆の「普説」に「諸仁者既要參禪學道、莫以_レ今

時_中為_レ勝_上。當以_レ古人_中為_レ標準。決不_レ相賺、終有_レ麗天之明。宗社中雜用_レ心者極多。雖_レ有_レ參禪之名、然無_レ參禪之美。或習_レ古人奇言妙句、或伝_レ俗士斷簡殘編。每至_レ坐_レ時無_レ安妥相。此乃不_レ純一用_レ心之過、非_レ知識良友之咎。儼移_レ此心於不知不_レ會處、下_レ拙鈍工夫十年二十年、驀然和不_レ知不_レ會拙鈍底、一時番転、便見不知而知不_レ會而會。巧自拙、智自鈍」(大正藏八〇・九三b)とある。この普説は、鎌倉時代の『蘭溪和尚語録』には収録されなかつたもので、再刊時に収録されたことが刊記に記されている。「鈍工」は、蘭溪道隆の普説を踏まえたものなのかもしれない。

(5) 趙州無字…『趙州狗子話』『趙州無字』の公案。『趙州真際禪師語錄』の示衆に「問、狗子還有_レ仏性也無。師云、無。學云、上至_レ諸仏下至_レ螻子、皆有_レ仏性、狗子為_レ什麼_レ無。師云、為_レ伊有_レ業識性_在」(続藏一八・一五七c)とあり、『從容錄』第十八則「趙州狗子」に「拳、僧問趙州、狗子還有_レ仏性也無。州云、有。僧云、既有、為_レ甚麼_レ却撞_レ入這箇皮袋。州云、為_レ他知_レ而故犯。又有_レ僧問、狗子還有_レ仏性也無。州曰、無。僧云、一切衆生皆有_レ仏性、狗子為_レ什麼_レ却無。州云、為_レ伊有_レ業識_在」(大正藏四八・二三八c)とある。

〔寂室13〕『紀年録』

三年乙巳。十六。

一日、隨衆摘茶。有一僧、視師以為奇貨。謂曰、汝才不凡。胡其匏繫於此。方今関左有約翁儉公、天下緇徒龍門也。汝儼入彼鑪鞴、則大器必成矣。師依其言、乃拉是僧偕行。翁時董禪興席。師到則執弟子礼。前夜翁夢、如諸聖降現光明照燭於山河。故以元光為法諱志瑞也。

〔訓〕三年乙巳。十六。

一日、衆に随つて茶を摘む。一僧有り、師を以て奇貨と為す。謂いて曰く、「汝の才不凡なり。胡ぞ其れ此に匏を繋ぐや。方今、関左に約翁儉公有り、天下緇徒の龍門なり。汝償し彼の鑪鑪に入らば、則ち大器必ず成ぜん」と。師其の言に依り、乃ち是の僧を拉ぎて偕に行く。翁、時に禅興の席を董す。師到るや則ち弟子の札を執る。前夜、翁夢るに、諸聖の降現し光明山河を照燭するが如し。故に元光を以て法諱と為し瑞を志すなり。

○『紀年録』：寂室元光の孫弟子にあたる和甫斉忍の編纂によるもので、寂室の記事が年次順にまとめられている。和甫は靈仲禅英（一三〇〇～一四一〇）の法を嗣いだ僧侶であり、正長元年（一四二八）に永源寺の十一世となる。

『紀年録』は、応安二年（二三六九）に円応禅師と諡された記事で終わる。○掲載書籍：「訓中本別・八」。○随衆摘茶：禅院の普請としての茶摘みを指す。『紀年録』により、十四歳で三聖寺の無為昭元に参じ、十五歳で落髪受具しているため、本段は無為昭元のもとでの普請作務「摘茶」と判断できる。この時、無為昭元は三聖寺の二世であり、嘉元三年（一三〇五）十二月に東福寺に入寺する。したがって、正確に言えば寂室の三聖寺修行中ということになる。しかし、三聖寺は東福寺に隣接した寺院であり、東福寺の塔頭のな役割をも担っていた。東福寺と三聖寺の立地状況からみても、東福寺の「普請」での「摘茶」に、三聖寺の所属する寂室も「一山」総出の「普請」として参加したと考えるのが自然であろう。○奇貨：珍しい宝。逸材。司馬遷『史記・呂不韋伝』「子楚、秦諸庶孽孫、質於諸侯。車乘進用不饒、居處困、不得意。呂不韋買邯鄲、見而憐之曰、此奇貨可居」に基づく語。○匏繫：匏（ひさご）を繋ぐ。転じて、滞留する、留まるの意。○関左：関東。京都から見て「関（鈴鹿関・不破関など）の左（東）」で、ここでは関東のこと。○約翁儉公：臨済宗大覚派の約翁徳儉（一二四〇～一三二七）のこと「補一」。○龍門：黄河中流の急流。魚が登り切れば龍に化するとされる。すぐれた師家のいる叢林にたとえる。○緇徒：黒衣の徒で僧侶のこと。○鑪鑪：鑪と鑪（ふいご）。鍛錬を受ける道場のたとえ。○禅興：禅興寺のこと。○董席：寺の住持を勤めること。○光明照燭：仏・聖衆の瑞相が光明を放ち、一山を照らすという夢。『祖庭事苑』等にも類例が見られる。○法諱：法

名。出家後に新たに付される僧名。○志瑞：吉瑞の意を汲んで命名に反映。

【訳】三年乙巳（二三〇五）。十六。

ある日、修行僧の一行とともに茶を摘んでいたところ、一人の僧が寂室を見て逸材であると感じた。そこで言った、「あなたの才能は非凡である。どうしてここにとどまろうとするのか。今まさに関東には約翁徳儉和尚がおられ、天下の修行僧が志を立てて集う登龍門のような存在となっている。もしあなたが約翁和尚のもとに入門すれば、大成することは疑いない。寂室はその言葉に従い、その僧とともに関東へ向かった。当時、約翁は禅興寺の住持を務めていた。寂室が到着すると、すぐに弟子の礼をとって参じた。その前夜、約翁は夢を見ていた、それは諸聖が降り立ち、放つ光明が山河を照らし出すような瑞相であつた。そこで約翁はその瑞相にちなんで寂室に「元光」という法名を授けたのであつた。

【東福寺での茶の栽培】【摘茶】鎌倉期以降、禅院では茶樹の栽培が僧の作務として行われており、東福寺も境内やその周辺に茶園を備えていた。この点については、白雲慧暁（？～一二九七）『仏照禅師語録』『東福寺語録』の「普請種茶」があることから、鎌倉時代の東福寺における茶の栽培が確認されるため、当時の状況にも符合している「鎌倉禅茶10―8」。禅院では、修行僧が一山総出の普請作務で行う茶摘みもその重要な修行であつた。寂室は十四歳で無為昭元に参じ、十五歳で受具しているため、本段の「随衆摘茶」は、出家直後の東福寺における正式な修行作務としての茶摘みと理解できる。隣寺であり塔頭である三聖寺僧として参加したものであろう。鎌倉時代後期の東福寺でも、茶の栽培が行われていたと考えられ、若年僧が普請として参加するのは自然である。また、寂室の伝記に摘茶の記事が残されている点は、東福寺における茶栽培の実態と、摘茶が修行僧の修行として重視されていたことを示す貴重な史料と言える。ただし、弥天永釈

撰「寂室和尚行状」には、「十五薙髮。從僧適江之田上県、偶見一僧閉関宴坐、愛慕風標心中発願。十六東行。投礼禅興約翁和向受具、因徴前夢曰元光」（続群九下・五八四）とあり、この記述はない。

〔補注〕

（一） 約翁侯公：臨済宗大覚派の約翁徳儉のこと。もと相模（神奈川県）鎌倉の路傍の棄子である。幼きときより建長寺の蘭溪道隆に預けられ、十六歳で東大寺にて受戒。道隆が建長寺から建仁寺へ移るに従つて侍し、後に入宋して諸師参学する。帰国後に、鎌倉の長勝寺の開山となり、東勝寺、浄妙寺、禅興寺を歴住する。その後、京都建仁寺、鎌倉建長寺の住持となり、文保二年（一二一八）に後宇多上皇の請によつて、京都南禅寺の住持となる。仏灯国師と諡する。『仏灯国師語録』がある。

〔寂室14〕『永源寂室和尚語』下「江州永源寺開山円応禅師行状」

斯年十五落髮受具。適江州田上県。偶見一僧返関宴坐。心窃愛慕。從此要学離文字法。一日随衆摘茶。有一僧、視師以為奇貨謂曰、汝才不凡。胡其匏繫於此。方今関左有約翁儉公、天下緇徒龍門也。汝儻入彼鑪輔。則大器必成矣。師依其言乃拉是僧偕行。翁時董禅興席。師到則執弟子礼。前夜翁夢、如諸聖降現光明照燭於山河。故以元光為法諱志瑞也。

〔訓〕斯の年十五落髮受具す。江州田上県に適ゆく。偶たま一僧の関より返りて宴坐するを見る。心窃かに愛慕す。此より離文字の法を学ばんと要す。一日衆に随つて茶を摘む。一僧有り、師を視て以て奇貨と為す。謂いて曰く、「汝の才不凡なり。胡ぞ其れ此に匏繫するや。方に今関左に約翁儉公有り、天下緇徒の龍門なり。汝儻し彼の鑪輔に入らば、則ち大器必ず成ぜん」と。師其の言に依り乃ち是の僧を拉えて偕に行く。翁

時に禪興の席を重す。師到りて則ち弟子の礼を執る。前夜翁夢みらく、諸聖の降現し光明の山河を照燭するが如し」と。故に元光を以て法諱と為し瑞を志すなり。

○「江州永源寺開山円応禪師行状」：一条文守の撰になる寂室の伝記。○掲載書籍：「大正蔵八一・一三四b」。○落髪：剃髪して髪の毛を落とすこと。出家。○受具：具足戒を授かること。本来は具足戒を授かることを意味するが、日本の場合は菩薩戒の場合であっても受具と表記される。○江州田上県：江州は近江国、田上県は天津市東南端あたりにあったあった地名（現在の田上地域）。○宴坐：くつろぎ坐る。○離文字法：不立文字の禪宗の教え。

【訳】その年十五歳の時に剃髪して受戒した。近江（滋賀県）の田上県に行ったところ、たまたま一人の僧侶が関より戻ったのちに静かに坐禅するのを見た。そして、心の中でひそかに素晴らしいことと思い憧れた。これ以降、離文字法である禪宗を学びたいと思うようになった。ある日、修行僧の一行とともに茶を摘んでいたところ、一人の僧が寂室を見て逸材であると感じた。そこで言った、「あなたの才能は非凡である。どうしてここにとどまろうとするのか。今まさに関東には約翁徳儉和尚がおられ、天下の修行僧が志を立てて集う登龍門のような存在となっている。もしあなたが約翁和尚のもとに入門すれば、大成することは疑いがない」と。寂室はその言葉に従い、その僧とともに関東へ向かった。当時、約翁は禪興寺の住持を務めていた。寂室が到着すると、すぐに弟子の礼をとつて参じた。その前夜、約翁は夢を見ていた、それは諸聖が降り立ち、放つ光明が山河を照らし出すような瑞相であった。そこで約翁はその瑞相にちなんだ寂室に「元光」という法名を授けたのであった。

【東福寺での茶の栽培】【摘茶】既出。

〔寂室15〕『瑞石歴代雜記』卷一

師歳十六。一日随衆摘茶。有一僧視師、以為奇貨謂曰、汝才不凡。胡其匏繫於此。方今関左有約翁儉公、天下縉徒龍門也。汝償入彼鑪鑪、則大器必成矣。師依其言乃拉是僧偕行。翁時董禅興席（相州鎌倉福源山禅興寺）。則執弟子礼。前夜翁夢、如諸聖降現光明照燭於山河。故以元光為法諱志瑞也。

〔訓〕師歳十六。一日衆に随つて茶を摘む。一僧有りて師を視て以て奇貨と為す。謂いて曰く、「汝の才非凡なり。胡ぞ其れ此に匏繫す。方に今関左に約翁儉公有り、天下の縉徒の龍門なり。汝償し彼の鑪鑪に入れば、則ち大器必ず成ぜん」と。師其の言に依りて乃ち是の僧を拉きて偕に行く。翁時に禅興の席（相州鎌倉福源山禅興寺）を董す。則ち弟子の礼を執る。前夜翁夢むらく、諸聖降現して光明の山河を照燭するが如し。故に元光を以て法諱と為して瑞を志すなり。

○『瑞石歴代雜記』…永源寺に残る史料に基づいて編纂された永源寺の編年体歴史書であり、弘化四年（一八四七）に永源寺の関係者によって成立した。○掲載書籍…『永源町史・五三六頁』。

〔訳〕師歳十六。ある日、修行僧の一行とともに茶を摘んでいたところ、一人の僧が寂室を見て逸材であると感じた。そこで言った、「あなたの才能は非凡である。どうしてここにとどまろうとするのか。今まさに関東には約翁徳儉和尚がおられ、天下の修行僧が志を立てて集う登龍門のような存在となっている。もしあなたが約翁和尚のもとに入門すれば、大成することは疑いない。寂室はその言葉に従い、その僧とともに関東へ向かった。当時、約翁は禅興寺の住持を務めていた。寂室が到着すると、すぐに弟子の礼をとって参じた。その前夜、約翁は夢を見ていた、それは諸聖が降り立ち、放つ光明が山河を照らし出すような瑞相であった。そこで約翁は寂室に「元光」という法名を授け、吉瑞を託したのであった。

【東福寺での茶の栽培】【摘茶】既出。

【寂室16】『弥天永釈語録』

維貞治六年龍集丁未季秋初吉、開山永源寂室和尚大禪師示寂於含空台正寢。越七日小師比丘永釈哀慟匍匐、謹以清茶香鉢之奠、致祭於靈塔前。其文曰、

嗚呼哀哉。師已棄我、忽戢化權、滅昏衢之明燭、失苦海之慈航。天耶非天耶。双淚竭而虞血、命耶非命耶。中心熱而探湯。風吹双林宣暢拘戸之遺教。石瘞隻履顛揚少室之旧章。天地震悼、鬼神哀傷。秀氣低圧諸峰、瑞石翳鬱。正脈分列万派、永源在洋。維孫維子以繁以昌。煮北焙之茗、熬南溟之沈。寂定不昧、鑑斯微忱。嗚呼哀哉。尚亨。

【訓】維れ貞治六年龍集 丁未季秋初吉、開山永源寂室和尚大禪師寂を含空台の正寢に示す。七日を越え小師比丘永釈哀慟匍匐し、謹んで清茶香鉢の奠を以て、祭を靈塔前に致す。其の文に曰く、「嗚呼哀しき哉。師已に我を棄つ。忽ち化權を戢め、昏衢の明燭を滅し、苦海の慈航を失す、天か天に非ざるか。双淚竭きて血を虞る、命か命に非ざるか。中心熱して湯を探る。風双林を吹いて拘戸の遺教を宣暢す。石に隻履を瘞め少室の旧章を顛揚す。天地震悼し、鬼神哀傷す。秀氣低く諸峰を壓え、瑞石翳鬱す。正脈万派に分列するも、永源は洋に在り、維れ孫維れ子以て繁し以て昌んなり。北焙の茗を煮て、南溟の沈を熬く。寂定味まず、斯の微忱を鑑みよ。嗚呼哀しき哉。尚亨。」

○掲載書籍…永源寺所蔵『弥天永釈語録』による。『弥天永釈語録』にはこの記事を合わせ合計八箇所に茶に関する記事が見られる。江戸時代に編纂された編年体の歴史書『瑞石歴代雜記』巻一「永源町史・五五一」にも同文が収録

される。○含空台：永源寺の寂室の示寂地。後に開山を奉る含空院として整備される。○初七日：師の遷化後七日目に初七日の祭文として読んだ。○永釈：臨済宗大覚派の弥天永釈（？～一四〇六）のこと「補1」。○哀慟：悲しんで泣き叫ぶ。○匍匐：地に伏す。○清茶香饌之奠：清らかな茶と、香ばしい供物を備える。○嗚呼哀哉：祭文で用いる典型的感嘆句。○師已棄我：『瑞石歴代雜記』巻一には「已（開祖在世作胡字滅後改已字）」と作る。『瑞石歴代雜記』によれば、弥天永釈は師の生前に案文を作っていたのだろう。その案文には「胡」の字にしていたが、亡くなったあとに「已」と改めたと伝承されていたとみられる。○戟化權：化權は權化で、仮にこの世に現された姿の意。權化（化權）を収めるで遷化のことを指す。○昏衢：暗い十字路。暗い十字路に迷って心が安らかではないこと。○慈航：衆生を渡す慈悲の船。○双林：双林は沙羅双樹のこと。釈尊入滅地の拘尸那揭羅（クシナガラ）に生えており、釈尊は沙羅双樹に囲まれて示寂した。○拘尸：拘尸那揭羅（クシナガラ）のこと。釈尊入滅地。○石壓隻履：隻履を石に埋む。達磨が片方の履を石棺に残して印度に旅だったという「石履達磨」の故事に基づく「補2」。寂室の葬送の記事の下火仏事法語が残っておらず、あるいは寂室も達磨と同じように火葬しなかった可能性はあるか。○薊薊：草木が盛んに茂るさま。禅林、叢林というように修行僧が集まる場所は林にたとえられ、ゆえに、草木が茂るさまは、修行道場が栄えている様子を指す。○北焙之茗：北苑（福建省建甌）で焙製される最上級の名茶。宋代には皇帝献上の龍鳳団茶を産出。永源寺周辺の茶を高級茶になぞらえて「北焙」と称した可能性も考えられる。○南溟之沈：南溟はるか南方にひろがる海。南方産の沉香。○寂定：迷いから解脱した心安らかな境地。○尚亨：祭文の結語。

〔訳〕貞治六年（一二六七）龍集丁未の季秋（九月）上旬吉日に永源寺開山の寂室元光和尚大禅師は、含空台正寝において遷化された。七日が過ぎ、小師比丘の永釈は深く悲しみ、地に伏して、澄んだ茶と香ばしい供物を供え、霊塔の前で祭を行った。祭文に言う、「ああ、なんと悲しいことか。師は已に私をお捨てになった。突然に遷化され、この我が心の暗闇を照らしていた明かりを消し、私は苦海を渡す慈悲の船を失ったのだ、天のしわざかそれとも天ならぬことか。涙は尽きて血が流れ出でるかと思うほどの悲しみである、これ

は命なのかもはや命ではないのか。胸は熱くまるで煮えたぎる湯のようである。風は釈尊入滅の双林を吹きわたり、拘尸那竭の門に残された教えを広く伝える。石棺に片方の履を残され少室（達磨）の旧章（古からの教え）を明らかにしている。天地も震え悲しみ、鬼神も哀しむ。秀れた気は諸峰を覆い、瑞石は鬱然として靈威をあらわす。正統の法脈は万派に分かれて広がったが、永源の法流は大海のように広大であり、弟子も孫弟子も多く活躍している。（師のために）北焙の茶をいれ、南海の沈香を焚く。師の迷いのない寂靜なる心は曇ることはない、この誠の証（祭文）を必ずご覧くださるであろう。ああ、なんと悲しいことか。どうかお受け取りください」と。

【葬送儀礼の献茶】【北焙之茗】寂室元光の初七日、法嗣の弥天永釈が寂室に對して、清茶と香饅を備えた上で祭文を述べている。実際に備えたということが明記されている点、備えたことを踏まえた内容の祭文であり、実際の儀礼と祭文の一致は重要である。「北焙之茗」は「南溟之沈」と對で用いられている。実際に輸入した「北焙」を用いた可能性もあるが、永源寺周辺の茶を「北焙之茗」として讃えた可能性も十分に考え得る。この永源寺周辺の茶は、江戸時代に「政所茶」という銘茶として知られるようになる。

〔補注〕

（１）永釈：臨済宗大覚派の弥天永釈のこと。寂室元光の法を嗣ぐ。甲斐浄光寺の住持を務めた後、近江の永安寺の開山となる。三河（愛知県）の甘泉寺、天恩寺の開山にもなる。永源寺に『弥天永釈語録』が残る。見性悟心禅師と諡す。

（２）石瘞隻履：「石履達磨」の故事。陝州（河南省）東の熊耳山に葬られた達磨が、片方の草鞋を残して西天に帰ったという故事をふまえた一節。『聯灯会要』卷二の菩提達磨章に「祖於後魏太和十九年丙辰歲十月初五日、端坐而逝。十二月二十八日、葬熊耳山。後三年、宋雲使西域、遇祖于葱嶺。手携隻履、飄飄独行。雲問、

師今何往。祖云、西天去」（続蔵一三六・二三〇c）とある。

〔寂室17〕「月心慶円祭文」

維貞治六年歲次丁未九月朔旦、永源開山寂室和尚入般涅槃於含空台。越一日、法姪比丘慶円謹以香茗之奠、百拜致祭于尊靈曰、惟師行解潔如水霜、学通内外、識見難量。壯年決志遠遊大唐、從容歷遍淮浙江湘昌、訪諸知識、登諸覺場。迨于中年、志滿帰郷、乃隱山林、断土利名羈、歲深月久、行履難藏。瑞石山下幻出宝坊、德輝赫赫、道誉揚揚。玉臣恭敬、不以為慶。勸請住持天龍・建長、聞之廻避、厭之推讓。正喜吾門法道殷昌、為大宗匠、為大棟梁。龍峰・牧阜扶起有望。那期一旦病入膏肓、知縁既尽、不用医方。俄爾無声、屹然坐亡。臨行自在、遺言孔彰。龜子不留、当夜便葬。於戲、苦海遽覆慈航、昏衢灯滅。杳々茫茫、祖庭寥落、誰復聯芳。円也不料、来此送喪。空切追慕、不勝痛傷。槌胸叫屈、告訴彼蒼、哀哭数声、涕淚数行。時当秋季、景色淒涼、金風撼々、玉露瀼々。悲歎之余、俛写些章、表誠貢獻、一茶一香。大寂定中、庶幾宴享。真相如活、巍々堂々、靈光不昧、煒々煌々。再来未願力莫忘。尚饗。

〔訓〕維れ貞治六年歲次丁未、九月朔旦、永源開山寂室和尚、般涅槃に含空台に入りたまう。一日を越えて、法姪比丘慶円、謹んで香茗の奠を以て、百拜して尊靈に祭を致して曰く、「惟え、師の行解の潔きこと氷霜の如く、学は内外に通じ、識見量り難し。壯年に志を決して遠く大唐に遊び、從容として歴遍し、准・浙・湘・昌に諸知識を訪い、諸もろの覺場に登る。中年に迫り、志滿ちて郷に帰り、乃ち山林に隱る。土利名羈を断つこと歳深く月久しくも、行履藏し難し。瑞石山下に宝坊を幻出し、德輝きて赫赫にして、道誉揚場たり。玉臣の恭敬、以て慶びと為さず。天龍・建長の住持を勸請せらるも、之を聞きて廻避し、之を厭い

て推し譲る。正に喜ぶべし吾が門の法道殷昌なるを。大宗匠と為り、大棟梁と為る。龍峰・牧阜、扶起す望み有り。何ぞ期せん、一旦病膏肓に入り、縁既に尽くを知りて医方を用いず、俄爾として声なく、屹然として坐亡す。行に臨んでは自在にして、遺言孔だ彰かなり。龕子を留めず、当夜便ち葬る。於戲苦海遽かに慈航を覆し、昏衢の灯滅す。杳々茫茫として、祖庭寥落、誰か復た芳を聯ねん。円も也た料らずも、此に來たりて喪を送る。空しく切に追慕して、痛傷勝えず。胸を槌ちて叫屈し、彼の蒼に告訴し、哀哭数声、涕淚数行。時に秋季に当たり、景色淒涼、金風城々として、玉露瀼々たり。悲歎の余に、些かの章を俛して写し、誠を表して貢獻し、一茶一香を捧ぐ。大寂定の中に、庶幾くは宴享したまえ。真相活するが如く、巍々堂々として靈光味まず、煒々煌々たり。再来し末の願い力めて忘るること莫かれ。尚饗。

○掲載書籍：図録『永源寺の歴史と美術』（粟東歴史民俗博物館、二〇〇三年、三二頁）。『瑞石歴代雜記』卷一「永源町史・五五二」にも同文が載る。○月心慶円：臨濟宗大覚派の月心慶円（生没年不詳）のこと「補1」。○歳次丁未：干支曆による年記。貞治六年（一二六七）は丁未に当たる。○朔旦：月初めの朝（朔日早朝）。○般涅槃：涅槃に入る。示寂の意。○含空台：永源寺の寂室の示寂地。後に開山を奉る含空院として整備される。○法姪：同門の僧侶のことを指す。○香茗之奠：香と茶を供えること。○行解潔如氷霜：行いと悟りが氷や霜のように清らかであること。○從容：ゆったり落ち着いたさま。○准浙湘昌：准・浙・湘・昌は中国の地名。中峰明本の活動地の周辺であり、准州は江西省建昌府一帯、浙江は杭州、湘州は湖南省長沙付近、昌は南昌のこと。○覺場：悟りを開くべき修行の現場。○土利名輶：名譽・利益という束縛の縄。○赫赫：光り輝くさま。○玉臣：高官・貴人の敬称。○殷昌：ゆたかでさかななこと。繁盛。○天龍：京都嵐山にある靈龜山天龍寺のこと「補2」。○建長：鎌倉山ノ内の巨福山建長寺のこと「補3」。○龍峰：龍峰庵。建長寺の約翁徳儉の塔頭。○牧阜：牧護庵のことか。南禅寺の約翁徳儉の塔頭。○病入膏肓：膏肓は心臓の下の膏と横隔膜の上の肓、体の奥深くで薬も針も届かない場所を指す言葉。「病入膏肓」

で病が治療ができない状態のことを指す。○屹然…山が高くそびえ立つさま。人に屈しないさま。○俄爾…まもなく。○坐亡…坐禅したまま入寂すること。○龜子不留当夜便葬…龜（棺）を残さず、その夜すぐに葬った。火葬を行わず土葬か「補4」。○慈航…衆生を渡す慈悲の船。○昏衢…暗い十字路。暗い十字路に迷って心が安らかではないこと。○杳々茫々…暗くぼんやりしている。視界のかすむさま。○聯芳…芳香（法脈）をつなぐ者。○叫屈…理不尽な目に遭ったことを声をあげて訴える。無念を嘆き訴える。○淒涼…寒気がするほど物寂しいさま。○金風…秋風。○撼々…枝葉が落ちる様子。○瀼瀼…露の一面にひろがるさま。○大寂定…涅槃・解脱の境地。○宴享…儀式的な宴。ここでは茶と香での供養を受けること。○巍々…高く大きくそびえ立つ様子。雄大で威厳がある様子。○焯々・煌々…ともに光かがやく様子。○尚饗…お受けください。祭文の結句として用いられる。

〔訳〕時に貞治六年（一二六七）丁未の歳の九月一日の朝、永源寺開山の寂室和尚は、含空台において静かに示寂された。その翌日、法甥比丘の慶円は、謹んで香と茶を供え、百回拝礼して尊い御霊に祭文を奉り申し上げた、「思うに、師の行ないと悟りの清らかさは氷霜のように澄みわたり、学問は内典・外典にも通じ、師の見識は到底量ることができないものでした。また壮年のころ、志を固くしてはるばる大唐に渡られ、ゆつたりと落ち着いた様子で、准・浙・湘・昌の諸地方を巡って数多くの善知識を訪ね、さまざまな覚りの場に登られました。やがて中年になり、志が満ち足りて郷里へ帰り、山林に身を隠された。世俗の利益や名誉といった束縛の手綱を断つことは長かったが、その修行のお姿は隠しようもなく明らかであった。瑞石山のふもとに宝坊（永源寺）を建立され、その徳の輝きは赫々として光を放ち、道徳の名声は世に高らかであった。高官・貴人が恭しく敬つても、少しも慶びとはされなかった。天龍寺や建長寺の住持として請われても、これを聞くや即座に辞退し、大利の住持となることを嫌って他の僧侶を推挙して譲られた。まことに喜ぶべきことは、わが宗門の法道が大いに盛んであることであり、師こそは大宗匠であり大棟梁であった。

先師・約翁和尚の遺徳を扶け起こす望みは大いにあったのだ。誰が予期しえただろうか、あるとき病が治療できないような状態になり、すでに縁が尽きたことを悟られていつさいの治療を用いられなかった。まもなくしずかに声を発することもなく、整然と坐禅したまま人寂された。臨終に臨まれても自在であり、その遺言はきわめて明晰であった。龕（棺）を留め置くことなく、その夜のうちにすぐさま葬った。ああ、慈悲の船が苦海のただ中で突然ひっくり返ったようなもので、暗闇を照らしていた明かりは消えてしまった。視界は暗く定まらず、祖庭は寂れてしまったではないか、誰が再びこの素晴らしい法脈を連ね得ようか。慶円ははからずもここに来て師を送ることになった。胸中はむなしく、ひたすらに追慕し、心痛は堪えがたいものだ。胸を打ちその無念を声をあげて嘆き訴え、蒼天に向かって叫び、数声むせび泣き、涙は数行にわたって流れ続けた。折しも秋の九月、景色は物寂しく、秋の風が枝葉を散らせ、玉露はしたたつて冷ややかである。悲しみのあまり、うつむいてこの小文を書き記し、心からの誠意を表して、一杯の茶と一炉の香を献じる。大寂定の中にあつて、どうかこの供えを安らかに受けたまえ。真実のお姿は今なお生き生きとして、堂々とそびえ立ち、靈光は決して曇らず、燦然と輝いている。どうか後日に再び来たつて私の最後の願いをどうか忘れられることのないように。謹んでお受けください。

〔補注〕

(一) 月心和尚：臨済宗大覚派の月心慶円のこと。延文年中に信仲自敬とともに入元。臨済宗大覚派の月翁元規の法を嗣ぐ。美濃定林寺、鎌倉建長寺、京都建仁寺、南禅寺に住する。南禅寺本地院に塔する。法嗣に一華心林がいる。月翁元規は約翁徳儉の法を嗣いだ僧侶である。したがって、寂室と同門の僧侶ということになり、故に祭文を記したものと考えられる。寂室の訃報を聞いてすぐに京都から駆けつけたのであろう。

（2） **天龍寺**：靈龜山天龍寺のこと。京都市右京区嵐山にある臨済宗天龍寺派の大本山。山号は靈龜山、本尊は釈迦

如来、開基は後醍醐天皇、開山は夢窓疎石。暦応二年（二三三九）、後醍醐天皇の供養のために創建された。同寺は夢窓派の住持する寺となり、相国寺とともに夢窓派の拠点となり、中世禅宗の中心的な役割を果たした。貞和五年（一三四九）八月、室町幕府により京都五山の第一位に列せられ、今日に至る。

（3） **建長**：巨福山建長寺のこと。神奈川県鎌倉市山ノ内にある臨済宗建長寺派の本山。山号は巨福山、本尊は地藏菩薩、開基は北条時頼、開山は蘭溪道隆。建長元年（一二四九）に創建された。蘭溪道隆以降、兀庵普寧・大休正念・無学祖元などが住した。暦応四年（一三四二）八月二十三日、室町幕府によって鎌倉五山の第一位に列せられて今日に至る。

（4） **龜子不留当夜便葬**：亡くなった当夜のうちに葬られたと記される点は、禅院における一般的な葬儀作法（入龜・拳龜・鎖龜・茶毘・収骨・納骨など一連の儀礼過程）と比較すれば、著しく簡略であり異例である。師・約翁徳儉が生前より簡略葬を遺言したことが知られ（館隆志「鎌倉期禅僧の葬送と靈骨器―建長寺塔頭からの発見事例を通して―」『禅学研究』九一、二〇一三年）、寂室の葬儀もこれに倣った可能性が高い。ただし寂室の場合は、それ以上に儀礼を省いた形であったとも考えられる。本史料は「龜子不留」と明記し、龜（棺）に納めなかったことを示す。ここから、①龜に入れないまま火葬に付した可能性、②龜に入らず即日土葬した可能性の双方が導き得る。しかし、火葬・茶毘に関わる語（焚化・焼身・収骨等）が史料群に全く認められない点を踏まえると、即時の土葬の可能性がより高いのではないか。いずれにせよ、寂室について入龜・拳龜・鎖龜に相当する法語が一切伝わらないことは、この記述によって十分に説明される。寂室自身は遺誡で「汝等見余氣絶、急須收窆。切莫留遺骸以使人見之。掩土疊石既畢。勸乎同志、只諷首楞嚴神呪一遍而已」と述べており、遺誡の内容から見ても、当夜のうちに龜を用いずそのまま土葬された可能性は十分に想定される。石を積んで覆う形（掩土疊石）から、簡易な石室・石棺状の埋葬形態を採った可能性も否定できない。なお、寂室が当初火葬されていない可能性については、館隆志「寂室元光―清高なる禅僧の生涯」『禅文化』二四二、二〇一六年）においても触れ

られている。ただし、その後に改めて火葬された可能性を否定するものではない。

【香茗之奠】寂室がなくなつた翌日の祭文を唱える前、焼香してから茶が供えられてから百拝の礼拝が行われた。祭文はその後を読まれたが、「一茶一香」とあるように、焼香と同列に扱われており、茶の供養が禅僧の葬送儀礼において如何に重要な儀礼であつたかがわかう。